

大日本帝国最後の陸軍二等兵物語

(太平洋戦争をかえり見て)

平成六年

吉村 善市郎

【謹呈するにあたって】

この文章は個人出版した際、お世話になった方々に謹呈しておりました。

その際、添えられた手紙の文面です

ふと気がついてみますと、もう古希に手が届く年になっていました。

いたずらに馬齢を重ねてきたようです。白日を空しく過ごしたように思われてなりません。

「私の歩んだ道程は、誤った軌跡ではなかったのだろうか？」

そういう疑問を感じてしまいます。

顧みますと、何故か大きな空白があるように思われるのです。

私は幼少の頃、北浜の松岡病院の“柳の枝でも骨にする”といわれたほどの名医、松岡院長（昭和十年代の松岡洋祐外相の親戚）に大変お世話になりました。母は、私が小学校四年の頃、先生のご恩返しに“外科の名医”になつてくれ、と言っておりました。しかし、その頃の私は、画家になりたかったのです。が、結局長男ゆえに、工学の道を歩むこととなりました。

昭和十三年、日中戦争が始まりました。私はやがて兵隊にとられる事を予期した母は、松岡先生を尋ね『内の息子は兵隊になれますか』と聞いたそうです。その当時、兵隊になれないのは国民の恥であったからです。

私の、青春のほんの一時、輝いた一瞬がありました。

それは軍隊での生活です。文中にあるような異常な環境に置かれて、不利を有利に転換するテクニックを会得しました。

とくに、軍隊で私の体験したすべての生活はここに網羅したと思えますが、先輩（軍隊の）から見れば、わずか四十六日余りの体験で、欠落したところは多々あるかと思われます。しかしこれが私の記憶の総てなのです。

私はこれを書き残すことによつて、これを読んで頂いた方に、昭和史の前半三分の一弱の中のほんの一頁に過ぎませんが、ご理解頂けたら幸甚であります。

私はこれを遺言の一部として“こんご人生晩晴を尊ぶ”を大切に、余生を送りたいと思っております。

善市郎 敬白

《目次》

一、入隊前

二、入隊の日

三、8連隊の生活

衛兵勤務

営内勤務

中之島の演習

小学校の同級生との出会い

トラックの不足

連隊の便所

古年兵のいじめ

不合理、非能率な敬礼

連隊の非常呼集

連隊の空襲

兵舎に住みついた南京虫

四、作戦部隊の新編成

鷹合小学校に駐屯する

兵隊の位

最初のバッチをくろう

軍隊のラツパ

最良の戦友にめぐまれる

小学校の小使いさん

靴に足を合わせられる

裸の軍隊

軍人勅諭

軍人が軍人勅諭の精神を忘れる

大使館付武官のつとめ

軍人勅諭を暗唱させられる

軍隊の学課

将校室出入り自由の特権を与えられる

軽機関銃を持たされる

作戦部隊の目的

作戦の機密を母に漏らす

五、技術将校の夢消える

自動小銃開発の構想

日露戦争の失敗

自動小銃の開発のおろそかになった理由

忍者の教えを失念する

太平洋戦争に合わない作戦要務令

海軍の大誤算

六、作戦部隊のつづき

堺の大空襲

七、作戦部隊の移動

砲兵部隊と同居する

蚤の大発生

演習

バッチ行軍

防空壕作り

酒とたばこの配給

営倉入りを免れる

残飯を食べる

砲兵隊

新兵が将校室で寝る

軍隊の食事

機密作戦の誤り

銃の点検

八、一期の検閲

九、終戦

鎌田兵長賭博に負ける

恩賜のたばこをもらう

臨時憲兵と復員

十、まとめ（無謀な戦争を顧みて）

戦争の性格

太平洋戦争の転回点

わが国とアメリカの第二次世界大戦の人的被害の比較

終戦の好機を逸す

シベリヤ抑留

河上肇の警鐘を軽視する

十一、あとがき

一、入隊前

昭和十九年十二月、不肖、吉村善市郎は福知山工業専門学校生産技術科1年生であったが学徒動員され舞鶴海軍工廠で働かされていた。寝起きしていたのは、工廠から4キロ離れた一山越えたところに有る寮であった。

十二月の或る晩、夕食を取っていた時、突然私宛の電報が舞い込んだ。“徴兵検査”の通知である。至急帰れとあった。

当時戦局は極度に悪化していた事は薄々感じていたが、徴兵延期の特典のある工科系の学生にまで、延期改正令によって1年繰り上げの徴兵検査を行う現実を目のあたりにして、戦局悪化が予想以上に深刻なものであると実感した。

私はその時、夕食の箸を驚きの余り思わず落してしまった。兵隊になる事がいやであった。

私は早速帰る身支度をして布団だけを残し、トランク2個を下げて舞鶴駅に向かった。駅にはその日の最後の大阪行きと京都市の列車が同時に止まっていた。気の動転していた

私は、その時大変な間違いをしてしまったのである。間違つて京都市行きにのってしまったのだ。気が付いた時にはすでに遅く大阪行きが発車した後であった。

その列車は満員で、客車には乗れず、しかたなく機関車の石炭の上に乗せられた。それからが大変であった。この路線はトンネルが多く、石炭の上の私は機関車の吐き出す煙がまともにかかり顔中ススだらけ、しかも息苦しく持っていたマフラーを顔に巻いて辛うじて急場をしのいだのを覚えている。そしてやっとの思いで京都駅に着き、なんとか最終の大阪行きの電車に間に合い大阪駅までは着けた。しかし不運はまだ続いた。地下鉄の終電車はもう発車した後だったのである。もうどうにも身動きが取れず、結局大阪駅でトランク2つを枕にして一夜を明かすことになってしまった。

舞鶴駅ですんなりと大阪行きに乗っていけばこんな目に遭うことは無かったのにと、悔やまれてならなかった。日頃のオツチヨコチヨイがこんな時に災いしたのである。

以前学校に、白いマフラーを首に巻き、軍力をひっさげた、かつこい出で立ちの特別操縦見習士官が勧誘に来たことがある。どうせ遅かれ早かれ戦場に駆り出され、戦死するのなら、戦闘機に乗って、いさぎ良く死んだ方が良いと心が動いた。然し、残念ながら裸眼の視力が1・2以上なければ戦闘機に乗る資格が無いと分かったので断念したことがあった。

家に着いて2日後に大谷女学校の講堂で徴兵検査があった。寒い日であったが裸になって検査を受けた。私は当時ひどい近眼で、左が0・1、右が0・3であった。従つて第一乙と認定された。

徴兵検査を受けたからには、入隊通知が来る事を覚悟しなければならない。

そこで早速技術士官受験の願書を出した。

昭和二十年七月一日午後一時に第8連隊に入隊せよとの赤紙が来た。向いが第38連隊であった。この第8連隊は京都にあった第9連隊とともに誠に不名誉な事に、西南戦争の時の汚名の名残であろう『又又負けたか8連隊それでは勲章くれん（9連隊）』と笑われて居たそうさ。

連隊に入隊する日の明け方、大阪の谷町を中心に大空襲があった。大阪市内の殆どが灰塵と化し、どこを見ても瓦礫の山、交通機関も止まってしまった。おかげで連隊に行く交通手段は自転車しかないような有様だった。

入隊の前夜、叔父の寅次郎、清三郎、昔の番頭※野村、それに親父の友人、知人が三十人程集まって、盛大な歓送会をしてくれた。そしてそのとき日の丸の旗に寄せ書きをしてもらった。

祈 武運長久 の大きな揮ごうは野村に書いてもらった。その記念すべき国旗が何処で紛失したのか、今は残っていない。

入隊の日は、親戚や親父の友人、知人、近所の人七十人位集まって見送ってくれた。林檎箱の上に立って挨拶をすることになつてしたが、どんな挨拶をしたら良いのか分からず、清三郎の叔父に教えてもらったことが記憶にある。

その日の出で立ちは、学生服に角帽、肩に日の丸の旗をたすきに掛け、見るからに勇ましい恰好であった。いよいよ出発の時刻がきた。午後一時連隊集合である。親父の自転車の荷台に乗ってでかけた。天王寺を過ぎたあたりからは一面焼け野原で余燼がくすぶっており、荷馬車の馬が腹を膨らませて死んでるのも見掛けた、まるでこの世の地獄を見た様な気がして嫌な気分であった。

途中谷町の親戚（間口九間位の大きな構えで、実際はそうでは無いらしいのだが一見証券会社の様な店であった。その従業員は皆兵隊に行つてしまい、主だけがその店を守っていた。ところでその奥さんはちよつと変わつていた。というのは嫁入りしてから、家事は一切やらず、もっぱら油絵を書いてばかりいるということだった。不思議に思つてその時主に聞くと、それが嫁入りの第一の条件だったそうである。人手も無く、女性の地位そのものも低かつたこのような時代に、家事炊事の出来ない人形の様な女性が生きて行けるのかと、人ごとながら心配であった）に寄つたが運良く焼け残つていた。どんな関係の親戚かおやじに聞かなかつたが、ともかくそこで暫く休憩をして連隊に向かつた。案の状交通事情が悪く集合時間に間合わず遅れて来た者も随分あつた。

入隊して軍服を支給された。私は着てきた服を親父に渡し、別れを告げた。最愛の息子を残り家路につく親父の後ろ姿は、なんとなく哀れで不安そうだった。

午後4時頃、ようやく遅れていたものも全員揃い兵舎の前に集合させられた。その時である、黒い雲がにわかにか空を覆つたと思うと、まっ黒な雨が夕立の様に降ってきた。

おかげで支給されたばかりの軍服がまっ黒に汚れてしまった。着たきり雀で、着替の軍服が無い我々は、その日早速洗濯をさせられたのである。

(※野村Ⅱ滋賀県彦根の造り酒屋の長男であったが、親に勘当され大阪に流れて来て我が家でわらじを脱いだ。大学出のインテリで字が上手く特に毛筆は有段者であった。昭和の初期の頃は『大学はでたけれど』と言われる程就職難であった。5〜6年当社にいてその後独立し、近鉄の某駅前酒屋をした。学があるのでたちまち酒類販売商業共同組合の理事長に推挙された。戦後故郷に錦を飾るべく、第一回衆議院に立候補したが惜しくも落選した)

三、8連隊の生活

衛門を入って正面にあるのが歩兵大隊である。8連隊の中では一番大きな兵舎で翼を広げたように南北に広がっている。右側の兵舎が多分機関銃(重機関銃)隊であり、左側の兵舎が砲兵隊(野砲)であったと記憶している。

哀れな事に機関銃隊に重機関銃がなく、砲兵隊に野砲がなかった、当然持つべき兵器の無い裸の連隊である。使える兵器はすべて戦地に持ち出され、内地決戦はまさしく竹槍での戦いとなる事が予見された。栄え有る大日本帝国陸軍の最後の哀れな姿で有ったが、それでも将校は勝利を信じ虚勢を張っていた。

砲兵隊の兵舎の北側に馬場があり、そこで将校がよく乗馬の練習をしていた。支給された銃は式単小銃で、大きさは38銃(サンパチ銃)といって日露戦争末期、明治三八年に開発された※小銃)と騎兵銃の中間ぐらいであった。粗製乱造で、実弾を5〜6発も撃てば使い物にならなくなる様な、お粗末な代物であった。

※小銃

1939年(昭和十四年)交戦国のおおくは、前世紀に設計され、すこしずつ原形を改良した槓桿(こうかん)操作式小銃を装備していた。

すべての小銃の性能は違わなかったが、構造の面でそれぞれ違っていた。性能のよい小銃は約800メートルの距離で、かなりの命中精度で射撃することができ、しかも弾丸はかなりの残存エネルギーをもち、おどろくほどの殺傷力を発揮した。

拳銃・小銃・機関銃Ⅱ日独伊・米英ソ歩兵器

ジョン・ウィークス著書参照

■ 衛兵勤務

初年兵の仕事に衛門での衛兵当番がある。これは前述の銃を持って、将校が出入りする度に直立不動で捧げ銃（つつ）をするのであるが、その木部の仕上げが荒削りなので、一晚衛兵に立つと木部が手に触れて手の平の皮が剥離して困った事になるのであった。

夜間の衛兵当番は一時間交代で、一時間仮眠すると起こされ衛兵に立つのだが、椅子に座つての衛兵任務であっても、昼間の演習で疲労困憊のせいもあって、眠たくてついうとうとしてしまうのである。ヒロポンの錠剤を持っていたので、2錠飲むがぜんぜん効かなかった。

兵舎の衛兵勤務は特に辛かった。角かどに4人立たされるのだが、これは立ちっぱなしである。ついうとうと、立ったまま寝てしまう。

意地の悪い週番将校（白地に赤の太い線のたすきを掛けている）は忍び足で見廻りに来るので、将校の来たのが分からず、居眠りが見つかるとどつつかれ酷い目にあう。

その反対に気の効く優しい将校は、音で目を覚ますようにと、わざと足音を立ててくれるので助かった。

兵舎の衛兵に立つ時は、新兵を驚かそうとおぼけの話などを聞かされた。

新兵が連隊勤務の辛さに耐え兼ねてここで首を吊って死んだとか、其れがおぼけになって出て来る、などと驚かすのである。

前述したように夜間の衛兵勤務は一時間交代の仮眠で起こされるのであるが、それはまるで、警察で犯人を自白に追い込む為に夜中に起こしてする拷問のようで、とてもつらい勤務であった。

■ 営内勤務

新兵の成績は、内務班勤務（一小隊は4班で、1班は14人で構成されていた）と実戦訓練と学課成績の三つで序列が付けられる。

内務班勤務とは所属する班内の勤務の事で有る。

寝具の片付けは、朝は起きると各自がするので問題はないが、準備のほうは夕方新兵が班長（伍長）以下古年兵の用意をするのである。これは、寝具の下布団を伸ばし、その上に毛布をかぶせ両端を下布団に巻き込み、さらに板で毛布のしわを伸ばすという、結構面倒な作業なのであるが、若し少しでもしわが残っているとやった者がバッチ（どつかれる）をくらうのである。

一班の14人は伍長、兵長、上等兵2人、一等兵3人に以下新兵が7人で編成されていた。新兵にはそれぞれ古年兵が付き、彼等がマンツーマンで内務班勤務の教育をするのである（これを戦友と称した）。

性格の優しい古年兵に当たると得をするが、反対に意地の悪い古年兵にあたるとみぢめで苦勞をさせられる。これが入隊した時の運命の別れ途である。

私の班に、班付きの兵長がいた。偶然にも彼は家の近所のK家の長男であった。

其の兵長は大学を出ているのに何故将校にならなかったのか、私は疑問に思っていた。

K兵長は30才位で人柄は非常に温厚、悪く言えば毒にも薬にならない屁みたいな存在であった。その性格のためであろうか、部下の上等兵になめられているようだった。

私に付いた古年兵は、運悪く班の中で一番意地の悪い上等兵であった。勿論くだんの兵長なんか眼中に無く、それどころか、私が兵長の家の近所で知己の中と知ると、わざと兵長の前で私をいじめ反応を見る、兵長は知らん顔であるから余計に増長するのである。

私はそんな兵長の不甲斐無さを内心恨んでいた。しかしこうなったら運命と諦める外仕方がないと開き直り、「よし、それではその上等兵に認められるよう班で一番の成績を上げてやる！」と覚悟を決めた。

朝6時に起床ラップで起こされ、顔を洗う前に班の掃除をする。箒2本、雑巾3枚が各班に置いてある、7人の初年兵の頭数には足りない。はみ出た者は水汲みの役であるが、これはすぐに終わってしまう。班に帰ってもする用事がないのだから必然的にポカンと立って他の者の掃除をしているのを見ているだけになってしまう。そんなところをに古年兵にみられるとにらまれ内務班の成績が下がるのである。私はそんなことにならないように一計を案じた。つまり就寝前に雑巾を布団の下に隠しておくのだ、だから翌朝は必ず雑巾掛けができるのである。

軍隊は総べからく要領である。“軍人は要領を本分とすべし”と教えられた。

“軍人は早飯、早糞でなければならぬ”これも教えられた。

飯の一番遅い者がバツカン（30センチ丸の筒で高さも30センチ位のアルミ製の飯入れで、馬に餌を与える時に使う入れ物に似ているところから馬つ缶と言うらしい）と食器洗いをさせられた。食事の遅い者は何かに付けてボンヤリで、洗い場に行っても他班から食器を盗まれたりして来る。員数が足りない全員に食事が当たらなくなるから、帰ってきて上等兵にこっぴどく怒られるが、良くしたものでそんな事を予期して各班には員数外の食器が2〜3人分必ず隠してあり、それを最古参の上等兵が管理している。

ところで員数外の食器だが、それを何処で調達したのかは不明であった。

しかし食器を取られたら、そのままではいけない。当然取り返さねばならない。

その時は私らの出番である。洗い場の両端に2人が見張りをしつつ監視にあたり、他班が食器を洗って居る隙を見て、サット手早く掏摸の様に盗むのである。

まさに軍隊は掏摸、置き引きの訓練所でもあった。

水道の水が止まる事も有った。そんな時は直径10メートルの防火用水で食器を洗う。不衛生この上無いことであった。

空襲で焼け死んだ馬が大八車で運ばれて来ることが2〜3回あった。その時の夕食は決まって馬肉の飯である、肉に渴れて居たので大変うまかった。

連隊に十日余り居ただけだが、風呂に入ったのはたったの1回であった、水道が止まる事が多く、風呂に使う水が足りなかったからであった。

■ 中之島の演習

演習と称して毛布をさげて中之島公園へよく連れて行かれた。

演習をした後は公園で毛布を太陽に干し、毛布の毛の間に隠れている蚤を探して殺すのである。

蚤殺戮作戦が終了すると、次は全員禪一丁になって川で泳がされる。

これは、入浴の代わりなのであった。

蚤取りと言い、入浴の代わりに水泳と言い、全く原始人になったみたいで、これがあの、栄えある大日本帝国陸軍の姿かと思うとなさげなくなった。

■ 小学校の同級生との出会い

同じ歩兵大隊の兵舎に、小学校の同級生のIが幹部候補生の伍長として、座がね付きの星を付けて威張っていた。階段を上って右側に、幹部候補生10人位が入っていた部屋があったと思う。

Iは私が入隊した事を知って、自分の部屋へ遊びに来る様勧めてくれた。それでちよくちよく遊びに行つたが、彼等の振舞は非常に横暴で、まるで愚連隊の様であったと覚えている。本来彼等の行動を注意すべき将校も、見て見ぬ振りをしていた。

或る日わたしがIの下士官室で遊んでいた時、同じ兵舎の上等兵が呼び付けられていた。聞くと朝鮮人(その当時は)だそうであったが、背丈は170センチもある立派な体格、容姿端麗、顔は男前、色は白く上品で見るからに聡明。顔つきも朝鮮人の特有のそれでは無く日本人の様な顔をしていた。私から見れば、どう見ても帝国陸軍の模範となる様な兵隊であった。

が、幹候の伍長たちは、その上等兵には何の落ち度も無いのに因縁を付けて、代わるがわるリンチを加えるのである。その間もくだんの上等兵は不動の姿勢を取り、何の抵抗もせず、ただされるがままに、毅然として倒れては立ち、倒れては立っていた。その姿は立派としか言いようがなかった。私はそれを見て哀れに思ったが止めようにも位が違うのでどうしようもなかった。そんなことがあつてから、私はIの部屋へ行かなくなった。

■ トラックの不足

或る日Iが、私の班に来て『吾が班長に許可を取つとくから、演習に出んと楽な用事をせんか』と誘った。

Iが指揮を取り、何処かの小学校に連れて行かれた。学童の椅子を疎開するのである。

総勢20人位で、一人2脚を担ぎ今里方面に行った記憶がある。演習よりもずっと辛く、Iにまんまと騙されたと気付いたが、後の祭であつた。

40脚の椅子を運ぶために20人も人間を使役に使うとは、なんとも非効率な事である。

トラックで運べば一度に何百と運べるのと思つたが、その当時民間のトラック迄徴発して戦地に持つて行き、国内には軍用のトラックしか無かつたのである。

そう言えば親父もトラックが無くて困つて居た事を思い出した。

昭和十六年、統制令によつて家業の自転車生産が出来なくなった頃、たまたま中山製鋼のロールのメタル納入の権利を取り一手に納めて居た。そのロールのメタル(砲金Ⅱ青銅の一種、銅90%錫10%)は、直径1メートル位のメタルを8分割したもので、重量は1個約50kgの目方が有つた。それを20トン運ばなければならないのだが、トラックがない。しかたがないので30トン積みの中古の舟を買い尻無川に係留しておいて、馬力や大八車10台で尻無川まで運び、そこで舟に積み換えて中山製鋼に納めていた。運搬で非常に困つたと親父がぼやいて居た。

余談であるが、其の当時水上警察から夜中に時どき電話がかかつて来た。その運搬用の舟の中で賭博をやつていたので管理を徹底してもらいたいの事であつた。

話しはもとに戻るが、軍隊は昔から麦飯ということであつた。

其れも私が兵隊嫌いの一因でもあつたのだが、しかし現実軍隊では一度も麦飯を食べた事は無かつた。意外に思ったのだが、總べて白米であつた。何故麦飯を食わすかと言えば※脚気(カッケ)にかかることの防止策であつたからである。

ところで、軍隊の飯に付く漬物(俗にコウコと言う大根に黄色の色粉を付けて二メートル位土地を掘り、ここに酒樽を入れて地中で漬けるのである)、このお美味しさを私は今も忘れられない。

戦後食糧が豊富に出回り、色いろお美味しい大根の漬物もたくさんあるが、私が軍隊で食べた漬物に匹敵するようなものには、未だお目にかかった事は無い。

其の当時、何処かの漬物屋が軍隊専門に作っていたとしても、その後も引き続き作って居る筈なのだが？

※ 脚気

ビタミンB1の欠乏のために末梢神経がおかされ、足がしびれ

たり、むくんだりする症状。

米飯（白米）を主食とする民族がかかりやすい一種の民族病。

当時日本の国民病でもあった。

■ 連隊の便所

連隊の便所の大使用の扉は、高さ1メートル位で下は25センチほど開いている、中で誰かが使って居るかどうかがわかるようになっていた。

便所の中は禁煙で、そこで煙草を吸うと下からも上からも、煙が外に流れ出て、忽ちバレてしまう。バレないよう煙草を吸うためには、煙を吐き出す時大便を溜める壺に顔を近づけて吐くのである。非常に臭いがそこが辛抱であり難行苦行であると同時に一種のスリルをも味合うことができるのである。

十年程前に中国へ視察に行った時、百貨店のトイレの扉が連隊と同じく1メートル位で、上下がアツパツパで驚いた（公園の大衆便所には扉はなかった）が、軍隊時代の事を思いだし懐かしく思った。

中国は現在、社会主義の市場経済導入を推進して近代化を目指している。先進国に追い着け追い越せと努力してるが、尚前途遠の感がある。

■ 古年兵のいじめ

初年兵が班内でへまをすると、各班を廻らされ『〇〇二等兵は×××のへまをしました。今後気を付けますからお許し下さい。』と中隊全部に恥を掛かされるのである。

昔はへまをすると、古年兵は色々ないじめをした。

例えば、蟬せみと言って柱にくらいつき、足を床から離してミンミンミンと声を出して鳴く、もうよしの声が掛るまで続けなけ

ればならない。これは非常にきついバッチである。

また鶯の谷渡りといって、床から椅子、そして机と、登ったり降りたりしてホーホケキョと鳴く。これもよしと言われるまでさせられた。

古年兵が新兵をいじめて遊ぶ余興の様なものであったが、私が入隊した時にはこれらは禁止されていた様である。

■ 不合理、非効率な敬礼

天気の良い日には兵舎の外で靴の手入れをさせられる。

そこへ将校が通ると、一番先に見つけた者が直立して『敬礼』と号令を掛ける。号令を掛けられるとその場にいた者は一斉に直立して将校に向かって敬礼をする。手入れ中の靴を置いてである。これが陸軍の伝統であった。おかげで靴の手入れがなかなかかどらない。非常に不合理、非効率な習慣を付けたものと呆れたものであった。

昔、テレビでコンバットと言う連続物のアメリカ映画を放映していた。

私はこれが好きで、見るのを楽しみにしていた。

話は、第2次世界大戦中のヨーロッパ戦線において、尖兵役の軍曹が一分隊を指揮し活躍する、非常にスリルとユーモラスに富んだ面白いものであった。

私はそれを見ながら、当時の日本の軍隊とアメリカの軍隊の違いを発見して大いに驚愕した。

それはアメリカ軍の将校は、作戦命令を下す時は非常に威厳があり、上下関係は厳然としているが、作戦が終わり、原隊に帰って自由時間の時は、全く上下の関係がなくフランクで軍隊生活は非常に愉快そうであった。また、将校は命令を出すだけで原隊に残り、尖兵の任務はサンダース軍曹が責任を持って指揮を取る。勿論無線で戦況を報告し指揮を仰ぐこともあるが、前線での裁量は軍曹に任されていた。大きな作戦の時には将校が戦地におもむき同行する場合もあったが、それでも作戦途中の小休止の時は、やはり将校と部下の会話は実に愉快で屈託のないものであった。

前線に行く時はジープで手前迄行き、そこから歩いて前線に行くのである。

日本軍は、初めからてくてく歩かされ、前線に着いた時はもうくたくたに疲れて戦意喪失であったのが現状だった。こうして比較して見ると日本軍とアメリカ軍のあまりの違いを知らされ改めて驚いた。

■ 連隊の非常呼集

連隊で非常呼集のラッパを夜中に鳴らすことがある。非常の場合にどれ位早く起きて、軍服を着て連隊の広場に集まれるかの訓練である。しかし上等兵はそのまま寝ていて集まらない、点呼を取るが勿論人数が足りない。将校はそれを知っていても知らん振りである、それほど日本の軍隊の上等兵は気促勝手な行為をしていた。アメリカの軍隊では有りえない事である。

■ 連隊の空襲

或る日の昼間、空襲が有った。

全員外に出て消火作業をした。一兵舎の大屋根に8人位が上がり、竹竿の先に荒縄を束ねた埃たたきを大きくした様な物を水に漬けて湿らせ、焼夷弾が屋根に落ちると払い落とすのである。何発か屋根に落ちたが発火するまでに払い落とし、火災から免れる事ができた。下にいる我々は、高い屋根で必死に活躍している者に拍手を送った。私は何もせず、落ちてくる焼夷弾を避けるため上を向いて眺めていた。

焼夷弾は直径6センチ、長さは30センチ位で六角形に見えた。これを50本位束ね、2段重ねにしたものが一つの塊となって落ちて来る。或る一定の高度になるとばらばらになって広がって落ちるのだ。

連隊に一ヶ所小さい防空壕があったが、一人も入って居なかった。その上に焼夷弾が落ちたが盛った土が軟らかいので、土に刺さって発火しなかった。

兵舎は、幸いにも消火に当たった兵隊の尽力により焼夷弾の被害から免れる事が出来た。目出たし目出たしであった。

焼夷弾は火力が強く水では消されないと教えられていた。いったん燃え出すと延焼を防ぐ為に燃えてない隣の建物を壊すしかない、まるで江戸時代の火消しそっくりである。

■ 兵舎に住みついた南京虫

兵舎に南京虫が住み着いていた。

南京虫は、字の通り中国の南京から輸入された荷物についてきた外来種の虫である。

昼間は全く姿を見せず、真夜中になると徘徊するやつかいなやつであった。

何時ごろから住みついていいるのか不明であるが、南京虫に悩まされた新兵もあった。

南京虫は必ず2センチ位の正三角形の形の3点を噛む。

幸い私は南京虫に嫌われたのか、一度も噛まれた事はなかったが、噛まれた者の中には、そこから膿んで手術を受けた者もいた。

四、作戦部隊の新編成

7月1日に入隊して10日余りたった頃、作戦部隊として新たに新部隊の編成があると知らされた。歩兵中隊の二個小隊の編成である。

全く顔ぶれが違っていた。8連隊からも私の外に何人か居たはずだが、誰一人知った者は居なかった様に思う。何処かで招集されて集まった、全く新たな顔ぶれであったように思う。

新たに軍服と銃を支給された。夏のことだからその外に青色の半袖開襟シャツもあった。

銃は連隊と同じ99式短小銃である、造りは同じく粗製乱造のお粗末な物であった。

銃剣も支給されたが鞘が無いので腰に下げる事が出来なかった。

これでやつと意地の悪い古年兵から開放されてほっとした。

新兵で平野の者が2人いた。私とK君である。K君は隣の第二小隊で、成績も小隊で一、二と聞いていた。郷土の恥にならない様に張り切った。

■ 鷹合小学校に駐屯する

駐屯地は東住吉区の鷹合小学校であった。

小学生が学童疎開したため、校舎はからっぽであった。

そこまで歩いていったが、そこに駐屯したのはわが一中隊だけであった。

小学校の一教室に一班が入り、寝起きする場所として我々に与えられた。

初めてそこで自己紹介があった。

班長は鳥羽伍長であった。彼は関大出身の幹部候補生であったが、士官学校で病気を患い乙幹（甲種幹部候補生が甲幹になれなかった者）に落とされてしまった。伍長で卒業するが座金付きの星は付けていない。太っていて、歩くと股ずれするので長距離を歩く事が出来ない、そのような班長であった。

■ 兵隊の位

私に付いた戦友は、関東軍に居た、鎌田と言う班付きの兵長であった。

背は小柄だが筋肉質の鍛えられた体をしていた。後で見せられた軍人手帳には、赤字で『酒くせが悪く酒を飲むと要注意』と書かれていた。兵長曰く（いわく）『わしはいくら手柄を立ててもこれ以上進級出来ない』と言って、すこしヤケツパチなどろがあった。

兵長の位は日中戦争の頃に作られた位であったと思う。伍長と上等兵の間の位で、下士官ではない。赤のフェルトの布（3センチ×5センチ位）に金筋一本が付いている。

兵隊の位は二等兵が星一つ、一等兵は星二つ、上等兵は星三つ、そして兵長は金筋一本、伍長は金筋に星一つ、軍曹は金筋に星二つ、曹長は金筋に星三つである。

伍長から曹長迄を下士官と称した。その上は准尉（特務曹長）、尉官、佐官、将官、元帥となる。

中隊の中隊長、小隊長は勿論の事各班の上等兵以上班長の名前を全部覚えさせられた、私は先天的に人の名前を覚えるのが苦手で苦労した。

■ 最初のバッチをくらう

一中隊の隊長は大尉で、二つの小隊には幹候出の少尉が二人いた。

中隊長の大尉は陸軍士官学校出でも幹候出でもない。

昔は陸軍に何百円かを納め、短期間の士官訓練を受ければ少尉に任官出来るシステムがあった。

中隊長はそのシステムを利用して少尉に任官し、その後大尉まで昇進した方で、いわばおぼっちゃんの将校であった。そのせいか私的制裁を禁じていた。

それでも中隊長の目の行き届かない班内では、私的制裁をやっていた。

最初にやられたのは、所持品の検査という名目で、持って居る現金を各自自己申告をさせ、そののちそれぞれの財布を開けて実

うちの小隊長は小田少尉と言ってマラソンの選手だったらしい、だからうちの小隊長は良く走らされた。

第2小隊長の小隊長は名前は忘れたが、優しい軟派型で近所の娘とねんごろになり、よく外泊していたのを我々は知っていた。戦後その婿養子になった。

■ 小学校の小使いさん

学校の小使いさんは、偶然にも隣村の喜連の人で、私の家をよく知っている人だった。

何かと便宜を図ってくれて、私の親に現状の連絡もしてくれた。

親父は羽曳野で、自転車と肉の塊を交換してテキを作り、それを班の頭数を重箱に入れ、母親は、これを小使いさんに預けて帰った。小使いさんは私の班に後で届けてくれる。と、このようなシステムが出来た。

このシステム利用して、母親が作ったおはぎも班に届けられた。班長以下全員が喜んでくれた。

母親との面会も、小使いさんの機転で小使い室を使い、こつそりと、しかし割と頻繁にしていた。妹もたまに母親に付いてきていた。

■ 靴に足を合わせられる

軍隊で、革靴と、親指のない先が丸くなっている地下足袋の運動靴を支給された。

軍隊では足の大きさに応じて靴を合わせるのでは無く、靴に足を合わせるのだと言われた。

だから靴の中で足が泳いでいて履き心地の悪いことこの上なかったが、仕方が無いので支給された靴で辛抱した。

■ 裸の軍隊

軍人にとって戦地で飯を炊く飯盒（はんごう）は必需品である。

しかし戦争も末期の当時は、飯盒の素材であるアルミは航空機の使用にも不足しているような状況で支給されず、柳こおりの弁当箱で代用させられた。アルミ製の水筒も無く、代わりに竹筒の水筒である。銃剣には鞘がなく、その銃剣も鋼では無く材質は軟鉄で焼き入れされて無いのが、工学の勉強をしてた私には一見してわかった。

これ程、鋼やアルミ、真鍮などの軍需物資が極端に枯渇しているのが現状だった。靴下は木綿製で生地が厚い丈夫なものであった。

普通靴下は、L字形が常識であるが、軍隊では真つ直で、履き心地の悪いものだった。これには意味がある、携帯食料の主食である米を靴下に入れて、戦地に臨む時に使う様になっていたのだ。

■ 軍人勅諭

軍人になったら軍人勅諭（辞書を見ると勅諭とは天子の命令、天子の仰せ、みことのりとある、つまり軍人に賜った天皇の命令、みことのりである）をかみならず暗記しなければならぬ。

吾が国の軍隊は世々天皇の統率したまうところにぞある、云々から始まって最後に5ヶ条の軍人の心得がある、

- 一つ、軍人は政治に関わらず唯々いぢぢに己が本分を全うすべし。
- 一つ、軍人は武勇を尊（たつと）ぶべし。
- 一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。
- 一つ、軍人は信義を重（おも）んずべし。
- 一つ、軍人は質素を旨（むね）とすべし。

以上私の記憶している五ヶ条はほぼ間違いは無いと思う。

■ 軍人が軍人勅諭の精神を忘れる

余談になるが第一条は軍人が政治に関与してはならないとある。つまり軍人勅諭が起草されたのは何時頃かはしらないが、シリアンコントロール（文民文官統制）システムが完成していたのである。

時の政治家は将来を洞察した先見性に富み、立派であったと唯々敬服する思いである。

その箇（たが）が弛み始めたのが1928年（昭和3年）の満州某重大事件（中国の東北軍閥の首領張作霖が列車で北京から奉天に向かう途中、関東軍参謀河本大作大佐らの陰謀で爆殺された事件で、議会では野党の民政党が「満州某重大事件」として田中義一政友会内閣を追及した、所謂「張作霖爆殺事件ともいう」）からで、これを機に陸軍の暴走が始まり、軍人が政治に関与し始めたのである。その後、※満州事変、2・26事件、日中戦争、太平洋戦争へと暴走は加速し、遂にわが国を敗戦の終着駅へと導いていったのである。

※ 満州事変

1931年（昭和6年）9月18日の柳条溝事件にはじまった日本の満州（中国東北）侵略戦争。

張作霖爆殺事件後、その子張学良は国民政府について日本に抵抗する姿勢を示し、国民政府の勢力は満州に進出した。それは「満蒙は日本の生命線」とみなす日本帝国主義にとり容易ならぬことであり、満鉄並行線問題・万宝山事件・中村大尉事件などが起こった。そのうえ、浜口雄幸民政党内閣は金解禁・合理化政策で独占資本本位の経済再建を目指したが、世界大恐慌と重なって失敗に終わり、とくに農村における窮乏は深刻であった。軍部には侵略戦争、国内のファッショ化による現状打開論が台頭、1931年の3月事件後、関東軍に結集した桜会を中心に満州事変の陰謀が進められた。

同年9月18日未明、関東軍はみずから手で柳条溝付近の満鉄の線路を爆破し、これを機に軍事行動を起こし、中国軍の無抵抗に乗じて翌19日に奉天・長春を、21日吉林を占領、同日朝鮮（駐屯）軍も関東軍の出兵に応じて独断で出兵した。

政府は事変不拡大を南次郎陸相に命じたが、関東軍はそれを無視して進撃、11月18日チチハルを占領、年内にほぼ北満を占領、翌1932年1月6日錦州を占領、さらに山海関に進み遼寧・吉林・黒竜江の三省を平定、関東軍は自治指導部を設置して満蒙独立運動を推進した。その結果清朝の廢帝（宣統帝）溥儀を執政として3月1日満州国を建国した。

この間、国内では十月事件・血盟団事件など急進ファシズム運動が相次ぎ、その過程で1931年12月、若槻礼次郎民政党内閣に代わって犬飼毅政友会内閣が成立した。しかし関東軍を押さえきれず事態を追認し、32年の5・15事件で犬飼内閣が倒れたあと成立した齋藤実内閣は、同年9月15日、日満議定書に調印して満州国を承認した。

そのご、この様な日本軍の暴挙により日本の国際的孤立化とファッショ化が急速に進展した。

※この項大日本百科事典参照

軍人勅諭を守らなかつたために、640数万人の死傷者を出し、国土が焦土と化し、国民は塗炭の苦しみを受けたのである。然し、今にして思うに、敗戦によって軍閥が解体された事が、かえってわが国の民主主義を確立し、今日の繁栄を実現したとも言えるだろう。

時の軍閥、特に陸軍は所詮井の中の蛙（かわず）で当時の先進国の実力も知らず、正確な戦力分析すらできなかった。それゆえ、完膚なきまでの敗戦という結果は、己の過信から生じた、自業自得の、当然の結果であるといえるだろう。

■ 大使館付武官のつとめ

大使館付きの武官として、時の陸海軍の将・佐官級の優秀な軍人を各国に派遣していたのは、特に先進国の経済力、軍事力、

兵器、生産力等その国の国力を調査する為でもあった。つまり、大使館付きの特権を利用して、極秘の情報を収集し本国にその詳細を報告していたと思われる。所謂スパイである。陸海軍の上層部はそれらの報告によって、彼我の戦力の差は熟知していたと思う、特に陸軍の兵器が格段にアメリカに劣っている事も知っていた筈である。

外交官とは自国の利益の為に平気で外国に嘘をつく正直者と揶揄されている。

■ 軍人勅諭を暗唱させられる

話しは元に戻るが、その軍人勅諭を新兵は順番に暗唱させられた。

お前はここからここまでと、順次廻つて来る。つまり言えないものもいた。言えない者は後でばつちをくらうのである。

新兵の殆どは幹部候補の資格をもっていた（当時は旧制中学卒業者には特別な者を除いて全員資格を持っていた）。

中には京大、早稲田、立教等の大学生、私を含めて高（工）専の者もいてインテリの新兵がかなりいた。

尋常高等小学校卒はごく少数いたが、教育のレベルが高く、付いて来れず彼等には気の毒であった。何故なら幹部候補資格者を対象に教えるからである。

■ 軍隊の学課

学課は主に歩兵操典を教材にしていた。

これは、歩兵の任務を、A6版厚さ2・5センチ位の一冊の本にまとめた携帯に便利なものであった。

この本を各自が持たされ教育するのである。

中学校ではこれを元に軍事教練をするのだから、復習の様なものであった。しかし新兵の中には忘れていたものもいた。

自慢する訳ではないが、私は一字一句全部暗記していて、小田少尉より私の方が良く知っているぐらいだった。

変な教え方をすると質問した。

例えば、飛行機を小銃で撃ち落とす簡単な数式（自分の目線に対して直角に飛行する飛行機はどだい無理であるが、自分に向かって飛行する飛行機の飛行速度は限り無く「0」に近づく、その時に小銃で撃ち落とすのである。機関銃でもなかなか当たらないのに小銃で撃ち落とす事は無理であるが、これを応用した数式）があったのだが、これが又あいまいな教え方をしていた。私

は工学部だから数学には多少自信があり、手を挙げ、その矛盾を質問するが、少尉はこれに答えられなかった。

■ 将校室出入り自由の特権を与えられる

2回程学課を受けた後、私は将校室に呼ばれた。

なんの事かと怪訝に思いながら将校室へ入ると、小田少尉の態度は思っていたより上機嫌で、私に『今後一切学課の時には質問しないこと』を約束させられたのである。

その代償として、将校室の出入りは自由、将校室に置いてあるタバコや菓子は欲しかったら勝手に持つていつでもよいと言われた。

普通将校室に入る時、新兵は『〇〇2等兵〇〇少尉殿に〇〇〇の用があつて参りました』と、直立不動で敬礼し、よしと言われ始めて入室を許可される。

出入り自由とは、その字の通り、だまつて許可無く出入り出来る事である。

偉い特権を与えられたものである、以後一切質問は慎んだ。

■ 軽機関銃を持たされる

小隊に軽機関銃が一丁あった。

大正時代の第一次世界大戦の頃に作られた古い代物で、銃座（脚座）がぶらぶらして安定せず、まともに狙いが定まらないお粗末な銃であった。小銃の5倍位の重さで、それを持つのは小隊で第一席の新兵の役目だった。それが私であった。

機関銃にはラジエータ（放熱用の大きなワツシヤ）の様な形をしたものが一定の間隔で幾つも銃の筒に並べた様に銃身と一体になったもの）が付いて、普通の状態でも此を担ぐと肩に食い込んだのだが、担いで走らされれば尚更のことであった。

機関銃はそもそも連射する為に作られた銃である筈だが、それを、一発撃ちの練習をさせられた。可笑しな話である、引金を引くと『それでは2く3発撃った』とよく注意された。

折角の機関銃がその用をなさない、此では物量戦でやって来るアメリカにはとても勝てないと思った。

■ 作戦部隊の目的

我々の作戦部隊の目的は、土佐の桂浜に陣を張り、アメリカのタンクの上陸を阻止することにあつた。

その方法として海岸に蛸壺を掘り、そこでタンクの上陸を待ち伏せして、指突爆雷（竹の先に爆弾を付けたような兵器）でキャタビラを破壊して動けない様にするか、布団爆雷（座布団の様な形と大きさの爆弾）をタンクの後にあるエンジンの上に乗せて爆破し機能を停止させ上陸を阻止する。このふたつがあつた。

ベニヤ板でタンクの模型を作つて此を動かして、タンクの死角に入る練習をさせられた。相手は動いているのですぐ死角から外れてしまう、なかなか難しい訓練であつた。

要するに人間魚雷ならぬ、人間爆雷であり、作戦を実行した者は必ず爆死するという、決死の作戦であつた。

■ 作戦の機密を母に漏らす

或る日母が面会に来た時、この恐ろしい作戦の事を話した。

すると母は顔色を変えて将校室へ行き、『うちの息子は一人で、息子が戦死したら跡継ぎがいなくなる、そんな危険な作戦から下ろして欲しい』と中隊長に言つたそうである。

よもやそんな事を言うとは夢にも思つていなかった。

軍の機密作戦を民間に漏らし、あげくに軍に入嘴するといふような事は、軍法会議に掛けられても仕方のないことなのである。重大事件になつても当然のことであつた。

後で将校室に呼ばれて、母の言つた事を知らされ、思わず血の気の引くような思いをしたが、幸い『お前の母親に掛つたら勝らん』と、一笑されてその事件は不問となつた。

五、技術将校の夢消える

或る日将校室に呼ばれた。

入るなり『貴様は命が惜しいのか』と質問された。そこで私は即座に『命は惜しくはありません』と返答した。すると小田少尉はこれを見いと一通の書類を差し出した。それは、入隊前に出した技術士官の試験通知であつた。

その書類を小田少尉の目の前で破棄した。その瞬間私の技術将校になるといふ夢は消え去つたのである。少尉に又貸しを作つた。

私には技術将校になったら種々の新兵器を開発する夢があった。

昭和十六年、自転車の生産が出来なくなった頃、砲兵工廠から擲弾筒（てきだんとう）※手留弾よりやや威力の大きい弾丸を發射する簡単な歩兵用兵器で超小型迫撃砲とも言える、口径50ミリで射程距離は約100メートル、通常戦地では小隊に2筒あり、敵の軽機関銃、重機関銃など撲滅のために使用する。射程が短いことと携行弾数が少ないことが弱点）を造らないかと、サンプルが届けられた。

これを見た私は、こんな兵器を使わずに小銃で擲弾筒に代わる使い方を考えた。

日本軍の手留弾は手に握って親指と人指し指の間隔が2〜3センチ開いた程度の大きさで、樽の様な形をしている。重いので野球の選手ですら30メートルも投げられたら良い方で、我々ならせいぜい20〜25メートルが限度だと思う、しかも投げても命中率は悪かった。

ドイツが使っていた手留弾は、柄が付いて、遠心力を利用して投げられるので比較的遠くに投げることが出来たし、命中率も高かった。然も柄をバンドに差せるので携行にも便利であった。

当時私は、ドイツの手留弾は全く知らなかったが、これを改造して小銃の銃身の先に差し込んで弾を發射するようにすると、手留弾と一緒に飛んで相当遠い距離を高い命中率で飛ばす事が出来る筈だと思っていた。そんな夢みたいな事を考えていた。

元來手留弾は肉迫戦用の弾であるが、これを使うと1〜200メートル手前から威力を發揮し、命中率も高いので肉迫戦もせずに済む。然も兵隊一人ずつ携帯しているので弾数も多くなり戦闘は有利に展開するはずであった。

こんな夢の手留弾が洋画の007シリーズ“ロシアより愛をこめて”の最終シーンの中に出てきた。

007がボートで逃げるが軍の高速艇に追いつめられてしまう、危機一発の時に、彼は手留弾をライフルの先のはめこんで引金を引く。すると見事100メートル迄迫った高速艇に命中し、危うく難を脱する。こんなシーンであった。

そのシーンを見ていた私は『あっ、これだ私が考えていたのは』と思わず膝を叩いた。

※ 手留弾の留は手偏に留と書くのが正しい。

アメリカがベトナム戦争で盛んにヘリコプターを使って戦争をした。

ニュースや映画でよく見たシーンである。これも私は入隊前に考えていた構想である。

私が子供の頃、ヘリコプターはオートジャイロと言っていたが、エンジンが一基でそれが故障すると忽ち墜落する危険な乗り物であった。翼がないので滑空出来ないからである。

このエンジンを強力にして予備に1基搭載し、装甲を強力にすれば、アメリカが使った様に利用出来ると考えていた。滑走路が

いらないので便利な乗り物である。

（現在自治体が持っているヘリコプターはエンジンが一基である。危険だからと徐々に2基のエンジンのヘリコプターに換えつつあるが、大惨事が起こる前に完了して欲しい。）

鉄条網を前線に張るのは工兵の仕事である。

杭を打つてからバリケートの有刺鉄線のコイルを背中に背負い、杭から杭へと走るのであるが、大変な作業である。

私の考えていた方法は、有刺鉄線を直径1メートルのコイルに均一にまいて、そのコイルが絡まない様工夫してヘリコプターで吊りあげ、水平に伸びる様に火薬で伸ばし、さらに地に落ちた時には適当な長さになる様にしておけば、速くて簡単に鉄条網がはれるのでは、と考えていた。

■ 自動小銃開発の構想

自動小銃は軍隊に入ってから考えた。

何故なら、陸軍は未だに日露戦争の勝利で、世界一の陸軍という妄想をひっさげていた。その過信によって武器の開発は停滞し、明治三八年に開発された38式歩兵銃（単発式）を日中戦争から太平洋戦争の終戦に至るまで使っていたのだ。その時期にはすでに米英等相手国は兵士に軽便な※短機関銃（自動小銃）を持たせていた。

それに比べ、我々に支給されたのは単発式の99式短小銃であった。入隊して吾が陸軍の装備の貧弱な事を知った私は、悲観し上層部の無能無策さに憤激を覚えたものである。前述の如く大使館付きの武官からの情報で、先進国の最新兵器の状況を上層部は知って居た筈である。陸軍の、特に技官の怠慢もある。

海軍のそれは陸軍に比べると相当進んでいたが、互いに閉鎖的で情報の交換、技術の交換もなかった。私が舞鶴工廠に居た頃此を知ったのである。

※短機関銃

1939年（昭和十四年）欧米では39型短機関銃ですべて簡単な吹きもどし（高圧ガス）式で作動した。

欠点は、発射速度が毎分600発であるから、すぐに弾が切れてしまうことであった。その欠点を補うために、自動装填式単発銃と連射式に切り替えることができる銃が開発された、弾は偶然？にも各国共通であった。

また故障の多いのも悩みの種であったようである。銃身が磨滅するので、交換式も使用されていた。

■ 日露戦争の失敗

日露戦争の時、ロシアの旅順軍港を封鎖し、そのうしろから要塞を攻略すべく満州軍総指令官大山巖、総参謀長児玉源太郎指揮下の第一〜四軍、総兵力15個師団を擁して、三軍を指揮する乃木希典大将は、難攻不落を誇る203高地攻撃の任に当たった。

その当時、北欧の大使から、ロシアのロジェストベンスキー指揮下のバルチック艦隊がアフリカの南端、喜望峰を廻りインド洋から日本海へやって来るとの通報があり、此の艦隊が日本にやって来る迄に旅順港とその要塞を占領しなければならぬと至上命令を受けていた。

軍港の封鎖は、広瀬武夫少佐（戦死後中佐）以下の活躍により成功したが、203高地は数次にわたる攻撃にも失敗し、戦死者の死屍が累累と重り、あたかも阿鼻叫喚の巷と化しているだけだった。

乃木の参謀伊地知は、砲兵出身であったが砲兵戦術において無能な参謀であった。何となれば、野砲や山砲でいくら弾を撃ち込んでも要塞の城壁はびくともしないのだから、もっと強力な要塞砲で攻める事を考えるべきであった。

またロシアは、既に日本軍には無い機関銃を持っており、その時の日本軍の軍服は黒、帽子も黒に赤の縁で、敵からは動きが良く見えるのであった。それらのことを考えれば、数を頼みの攻撃は、ただ敵の機関銃の餌食となるだけでいたずらに被害を増大させるだけのものだという事はわかっていたはずである。乃木の二人の息子も将校として参戦していたが、はかなくも戦場の露と散っていった。

乃木はあせっていた。が、参謀の愚策に一言の愚痴も言わずひたすら耐え忍のんだ。

彼は長州出身であり伊地知は薩摩。彼は藩閥の確執を避ける為に我慢したのである。藩閥の弊害がここにも露呈したのである。乃木は後に学習院の院長となり、明治天皇が崩御された事を知るや夫人と共に殉死した。

二人の息子を戦地で失い、将来を失望もしていたし、203高地で多く兵士を死なせた自責の念に対する償いもあったと思料されるが、実際の所は、西南戦争で軍旗を敵に奪われ、責任を取って自刃する寸前に明治天皇に諫められ切腹を免れた事もあって、天皇に命を預けていた乃木が天皇の崩御に殉じたのが真相であろう。

死後、乃木は軍神として乃木神社に祀られたが、彼は遠謀術数の軍師にあらず、愚直な將軍であった。ただ単に武士道の美学を心得た学者に過ぎないと私は思う。

話は元に戻るが、203高地で苦戦している事を知った参謀総長児玉源太郎は、現地を視察しこれではだめだと判断し、即座に本国の要塞砲を取り寄せ、ようやく難攻不落の203高地の要塞を陥落させたのであるが、この戦でも数万の兵士を無駄に戦

死させたのである。

203高地はかくして多数の戦死者を出し、漸くにして落とす事が出来たのだが、実は要塞を守備していたロシア兵は、長期の籠城によつて壊血病（ビタミンCの欠乏による病気で症状は徐々に現われるが、早期は全身の倦怠や無力感、食欲の不振リウマチ痛、重症では高度な貧血悪液質に陥る）を患い戦意を喪失しており、これも日本軍の最後の攻撃を有利にした事は言うまでもない。

■ 自動小銃の開発のおろそかになった理由

機関銃の原理は簡単である。

火薬の爆発の際に出る高压ガスを、銃身の出口の手前でバイパスを作り、ここからガスをフィードバックさせて弾丸装填装置のシリンダーをバックさせる、このガスが抜ける瞬間にバネで弾を押し出す、これを繰り返す事で弾が連続的に発射することができるのである。

重機関銃も軽機関銃も原理は同じで、これを限り無くコンパクトに軽くすることで自動小銃を作る事が可能になる。

歴史は遡るが、今から450年前の天文十二年旧暦八月二十日、台風で種子島に漂着した中国船に南蛮人3人が乗り合わせていた。その時彼等は火縄銃を携えていた。これが所謂吾が国の鉄砲伝来の幕開けである。

その当時のハイテク兵器はまたたく間に普及し、わずか32年後の「長篠の戦い」では織田信長が3000人の鉄砲隊を3段構えにして、日本一の武田の騎馬軍団を壊走させた。以後足軽の鉄砲隊が軍の主力となった。ちなみに信長の3段構えの戦法は世界初であった。

天下統一がなつた頃の日本は、当時の欧州の国にひけをとらない鉄砲大国であつたが、徳川の世になつてからは、幕府の方針もあつて鉄砲の生産量は急減し、銃の開発も停滞した。

江戸時代末期にはライフル銃に変わり、西南戦争の時には村田銃を使つていたと思料される。（村田銃は大村益次郎が外国の図面を見て開発した銃である）。

その後日露戦争の途中までそれを使つたと思われるが、明治三八年に漸く開発されたのが前述の38式の単発小銃である。

わが国はその当時、工作機械もお粗末、れっきとした軍需工場もなく、勿論量産技術も確立していなかつたと思われる。従つて外国から輸入された小銃も使われていたのではないかと想像されるが、その痕跡がない。列国ではすでに回転式の機関銃があつたのに、何故輸入して、日露戦争に使わなかつたのか疑問が残る。

日中戦争の始まる前、軍の要請で、兵器を量産するに当たつて、精度の高いマザーマシンを造る為に、世界各国の優秀な機械をサンプル輸入して、各機械メーカーに命じて分解して部分図を作り、これを元に部品を作り組立てたことがある。図面では表わ

せないノーハウがあり、始めはまともな機械ができなかったと言われている。

太平洋戦争の時、敵の捕虜に大阪砲兵工廠で旋盤を使わせたところ、こんなオンボロの機械は使えないとストを起こしたと仄聞しております。そんなガタガタの旋盤からでも一応製品が出来上がってきていたのだから、当時の日本の熟練工は巧みにガタを計算に入れて工作したのだろう。

昭和二三〜四年、私が大学生の頃でも旋盤やミーリングの送りネジのバックラッシュ（がた）を完全に止める理論を考えれば、博士号が取れると言われていた。

昭和三四年、初めて椿本鋼球がボールネジを開発し、現在では1000分の3ミリの精度を出すことが可能になり、さらに昭和四十年前半よりコンピュータ制御によるNC機械が開発され、今やそれが主流になり現在では一部の機械を除き我が国は世界一の工作機械の生産国となったが、過去を振り返ると紆余曲折、試行錯誤の苦心の賜物であり感慨深い。

昭和五年、ロンドン海軍軍縮条約交渉が始まった時、東郷平八郎元帥は83才軍事参事官として発言権が絶大であった、日本海海戦の完勝によりイギリスのネルソン提督と並ぶ二代名将とされている。

軍艦の保有率を米英の10に対して日本は7に抑えられこれに対し浜口雄幸首相と海軍の軍政を預かる財部彪（たからべたけし）海相は当時の日本の国力からみて妥協やむなしの考えだったが、加藤寛治軍令部長ら強硬派は東郷元帥の発言権を利用して反撃した。浜口首相は「東郷元帥の了解を得たので条約受諾を回答した」と嘘の発言をして、海軍の反発を抑えた。東郷も諦めて「百発百中の砲一門は、百発一中の砲百門に匹敵する」と吐いた名言をあまりにも精神的で非科学的と論じられた。

東郷のこの一言で陸軍もそれに倣い自動小銃の開発をしなくなったと思料される。確かに38式歩兵銃は当時世界水準の命中率の高い銃ではあったが、それを使いこなせる狙撃兵は100人に一人もいなかったのである。

日露戦争の203高地で、敵の機関銃にさんざん痛めつけられながらも、細心の配慮も発想の転換も無く、永年にわたって軍人は馴致され、自らの判断が出来なくなっていたのである。

「下手な鉄砲も数撃ちや当たる」昔猟師が大きな獲物をしとめて自慢すると、この様に椰揄された。しかしそれもまた事実であった。

アメリカ軍の自動小銃1丁で38式10丁に勝っていたと、戦後アメリカ軍が証言している。

又南方の島々を奪還したアメリカ軍は、よくもこんな粗末な兵器で戦（いくさ）をしたと、不思議に思ったそうである。日本は元来資源小国であるから、最小限の砲弾と弾でもって、最大の戦果をあげる事を訓練させられた。

従って米英が使っている自動小銃は知っていたが、敢えてこれを開発しなかったと思料される。

確かに自動小銃は資源の浪費である、小銃の弾は真鍮の塊である、米英の物量に対し精神力で戦う事を教えられていた。

■ 忍者の教えを失念する

江戸時代に活動した忍者は黒い着物をきていた。

それは暗闇で活躍するのに人目に付かず都合がよかったからで、所謂、現代風に言えば迷彩服である。203高地攻略の時の日本軍の服装は、黒色で味方からも兵隊の動きがよく見えた筈である。いわんやロシア兵からも同じである。

この時に迷彩服を考案していたならばあれほどの戦死者は出なかった筈であった、日本人は元来突貫民族であった。

太平洋戦争の時も、南方に展開した日本軍は暑いので白の開襟シャツを着ていた。

戦後アメリカ軍は、日本兵が柿色のズボンに白色のシャツを着ていたので木陰や葉っぱに隠れてもすぐにわかったと証言している。この時も203高地の失敗と同じ轍を踏んだのである。アメリカ軍は勿論迷彩服を着ていた、愚かしい事である。

陸軍の制服は日露戦争後、黒服に懲りて何時ごろから不明であるが、薄い柿色に変わった。

これを民間では満州色と言っていた。つまり満州の土の色に似ていたからである。

中国の土も同じである。中国の黄河はもとより、総ての河は黄色（土色）く濁っている、「百年清河を待つが如し」とは、中国では何年たつても実現しない事の喩えによく使われるが、中国と朝鮮半島のあいだの海を黄海と言われるのも、河から流れ出た土色の水で海の色が濁っているのので付けられたものであろう。

満州や中国の土地で戦争するには多少迷彩服の効果はあったと思われるが、南方に展開した緑の多い国々や島では、この色の軍服では通用しない。

陸軍の石頭では南国の緑の多い環境に合った迷彩服の発想はなかったのだろう。

私が十五年も早く生まれていて陸軍の技術に携わっていたとすれば（仮定）、陸軍の兵器も戦略も変わっていたと思うと残念至極である。

■ 太平洋戦争に合わない作戦要務令

私は入隊の前に作戦要務令（将校が勉強する本ⅡA5の厚さ2センチの大きさに4冊）を読んでいた。

本来日本軍は仮想敵国をソ連（ロシア）とし、ソ満国境の警備に重きを置いていた。従って戦法も大陸型で、食糧も現地調達を主体とし、補給、輸送は軽視していた。

アメリカの戦略は、先ず食糧、武器弾薬、医療品等を、如何に効率よく輸送し前線に届けるかを科学的に分析をした或る理論を

確立して、それに沿って作戦を立てた。

この理論はO・R（オペレーション・リサーチ）と言って、戦後は経営学に導入されたのである。

南方に展開した日本兵は、アメリカ軍と違って輸送を軽視した為、食糧、弾薬、医薬品、衣服などの補給が途絶え、開戦後1年あまりで物資が不足して不利な戦いを強いられしまった。気の毒であった。

此も大本營の参謀の、無謀な前線の拡大と、補給を視野に入れなかった作戦の過ちからである。

南方方面軍総指令官山下大将、連合艦隊指令長官山本大将、いずれも戦争には消極的であった。その為に東条大将に睨まれ、第一線に左遷された不幸な將軍であった。

いずれの大将も彼我の戦力の差を熟知していて「敵を知り、己を知らば、百戦危ふからず」の孫子の兵法を心得た名将であった。

■ 海軍の大誤算

これを機会に海軍の過信による失敗を記しておこう。

何年の頃か忘れたが、とにかく太平洋戦争の前の事である、アメリカとの国交がまだうまくいっていた頃の事であった。

其のころ八木博士（後の八木アンテナの創設者）がレーダーを発明した。

水平線の向こうにいる見えない艦船を捉える事の出来る便利な計器であり、世界特許を取った、全く新しい技術だった。

これを日本海軍に売り込んだ。ところが海軍の上層部はそんな計器は不用である、わが海軍は目視で戦うのだから訓練すれば猫の目の様に夜間でも敵艦を発見出来る、とこれを断ったのである。

目のいい者が、毎日夜空の星をみていると、猫の目の様に暗闇でも見える様になるらしい、訓練とはたいしたものである。

私も若い頃、夜空の星を見ると近眼がなると或る本を読んで実行したことがあるが、大した成果は得れなかったように記憶している。

アメリカ海軍は、この画期的な技術に関心を示し、八木博士の特許を買い、これに改良を加え性能を高めた上で艦船に搭載し、太平洋戦争に臨んだのである。

結果、アメリカ艦隊は、水平線の彼方にいる見えない日本艦隊の動静を捉えて奇襲攻撃を加え、これを太平洋の藻屑としたのである。残念な事である。

海軍も陸軍と同じく永年にわたり馴致され、自らの判断や発想の転換の出来ない石頭になっていた、残念至極である。

海軍の悪い事を書いたが、いいことも書いておこう。

陸軍より遥かに海軍の技術は進んでいた。その当時では世界水準を越えていた兵器があった。それは魚雷である。

海軍のそれは酸化剤に酸素を利用し経由を燃焼させた、アメリカは燃料（ケロシン系統）を圧縮空気で燃やし、これに水を噴霧して蒸気と燃焼ガスの混合気体を作った。そのため泡が多く発生した。それに対し旧海軍のそれは泡の発生が少なかった。従って航跡もあまり残らず敵に発見されにくいのである。因みに魚雷のスピードは平均32ノット、艦船のスピードは最高で32ノット（因に、戦艦大和は最高速度20ノット）とされているが、急にはスピードは出ない、発見した時はすでに遅く艦の体をかわず事が出来ない。

アメリカの魚雷は泡が航路となって永く尾を引くので早くから発見でき回避行動に移れたのである。担し昼間の明るい時の事である。

私が舞鶴海軍工廠にいた頃、角帽をかぶっていたので工廠内を比較的自由に行動できた。超機密工場である魚雷工場の中にも入り、魚雷を見たし、触れても見た。魚雷の大きさは直径50センチ位はあったと思った。太平洋戦争当時、伊36号第潜水艦（基準排水量2198トン全長108・7メートル、船幅9・3メートル大砲センチ1基、機銃25ミリ2連1基、航空機Ⅱ小型水上偵察機1機搭載）に搭乗して居られた当時の元海軍士官のN氏に資料を見せてもらったら、魚雷の直径は53センチ長さ7・15メートルであった。その潜水艦は船首に発射管6基あり、17と19本搭載していたとされていた。終戦直前のアメリカの魚雷は不発弾が多かったと証言しておられる、アメリカ軍もその当時は増産に追われ粗製濫造の兵器であった。

六、作戦部隊のつづき

話しは元にもどるが、鷹合小学校に駐屯して間のない頃、こんな歌を教えられた。

「いやじゃ有りませんか軍隊は、かねの茶碗にかねの箸、仏さまではあるまいに一膳めしとはなさげなや」

風呂は十日に一回近所の風呂屋に行ったが、行かない日は水道水で体を拭いていた。

将校室に時々用もないのに呼ばれた、班に帰ると初年兵が総員バツチをくらっていた。班に入らず済むまで外で待っていた。誰が連絡したのか未だに謎である、班に入るのが照れ臭かった。

■ 堺の上空襲

夜中に空襲があった。毛布を20枚づつ紐でくくり、銃は何丁か毛布にくるんで裏の畑に疎開するのである。毛布20枚は相

当重たかったので苦勞した。

その時は堺方面の空襲で、南の空は真っ赤に染まっていた。空襲の状況をラジオで聞き、それを100メートル間隔に配置された3人の伝令が、300メートル離れた中隊長に報告するのである。最初の伝令が伝えた内容と、最終の伝令の内容は相当違っていた。

伝言を伝えるゲームで、10人位が並んで順次伝言を伝えて行くと、最初の内容が最後には相当違って伝わってしまう面白い遊びがあるが、それと同じである。

人の噂も人から人へ伝わって行くと、話しがだんだん大きくなることがある。口伝と言うものほどあてにならないものは無い。前述、コンバットの事を書いたがアメリカでは無線で連絡していた、技術の差がここでもあった。

七、作戦部隊の移動

7月下旬に移動命令がでた。

何処へ行くのか全く知らされていない、完全軍装？（但し弾薬の携行なし）で背囊（はいのう）に毛布を巻いてコの字型にくくり付けての行軍であった。

池田市と宝塚のあいだの山あいを歩いた事は地形から覚えているが、その後はどこを歩いたか全く覚えていない。とにかく一日キロ、3日間歩いて姫路の北北西の山奥の中国山脈から流れる揖保川に沿って北上し、山崎の町を通過して橋を渡り2キロ程奥の川に沿った村の小学校に入った。

道中のどろが渴いて辛抱が出来ず、田圃の水をタオルにしたして飲んだ。

肥料に人糞を撒いているような非衛生的な水である。古年兵に『こんな水を飲んだら病気になる』と注意されたが背に腹は換えられない状況であった。

水筒を携行していなかったからである。

初年兵で3日目に足の裏の皮がすっかりめくれて赤裸になって歩けなくなった者もいた。近くの国鉄の駅から汽車に乗せたが、駅からどうして駐屯地まで行ったのか？

悲惨な事であった。

鳥羽班長も長歩きできないので、初めから汽車に乗った。

■ 砲兵部隊と同居する

新駐屯地の小学校は、田舎なのに学童は居なかった。疎開する必要もなさそうなのに不思議であった。そこでは新たに砲兵中隊と同居した。

我々歩兵中隊は学校の講堂で全員が寝起きし、砲兵中隊は教室で寝起きした。その中隊には野砲がなく、砲兵に大砲がなくてどうして戦うのか疑問に思った。鷹合小学校では教室の部屋ごとで班が別れていたが、ここでは部屋の仕切がない。あっぱばである。一望にして全中隊を見渡せた。

■ 蚤の大発生

人間が集団で一ヶ所に住むと不思議に蚤が自然発生するらしい。講堂の床板のすき間に、蚤が大量に住み付き夜な夜な悩まされた。腹巻きをしていたので、朝外に出て取ると十匹位の蚤が飛びだした。

ここに移ってから風呂は三日に一回、村の百姓の家に風呂の水汲みを手伝って入れてもらった。鳥羽班長と私と高専から入った来た有本君と、もう一人の4人がお世話になった。行くと茶菓子の代わりに、炒った豆を出してもらった。

我々3人の初年兵は、遠慮せずボリボリ食べて、班長に遠慮せんかと注意された事を覚えている。

■ 演習

演習は校庭か校外でやった。銃を撃つ姿勢には2種類ある。

伏せの姿勢と、左足の膝を立てこれに左手で銃を支えて撃つ姿勢の二つだ。また歩伏といって敵前で弾を避けて進むのにも2種類あった。

私は、小田小隊長に全部の型が完成していると褒められ、練習をせず新兵の型を直す役になった。厳しい訓練のあと、演習の合間に小休止といつて5分から10分の休息があった。しかし幹候資格者には座つての休息は許されず、立ったままでの休息である。しかしそれでも疲れた者は石に腰を掛けたり、地べたにへたり込む者もいた。疲れて立ってられないからである。小田少尉は手帳にこれらの者をチェックしていた。大半の者が幹部候補生の資格者であるが、全員将校になれば将校ばかりになってしまうので、篩(ふるい)にかけるのである。これも小隊長の任務であった。

■ バッチ行軍

小隊長は前述の様にマラソンの選手で、走るのが好きであった。

或る日バッチ行軍と称して起床と同時に軍装し整列させ、朝食抜きで走らされた。

昼飯も無しで、午後4時頃まで走りずめである。勿論すべての訓練は古年兵抜きで、彼等は学校に残って休んでいた。新兵だけがしぼられた。朝昼食抜きの走り続けで腹がへり、血糖値が下がり、脳貧血を起こし倒れる者や、疲れて倒れる者が大半であった。最後まで頑張ったのは、私と有本君を含めて5〜6人だけであった。

その時は私は軽機関銃を持たず小銃であったが、倒れた者の小銃を4〜5丁担いだ、他の元気な者は肩を貸してやり、曳きずる様にしてやつとの思いで原隊に辿りついた。

小田小隊長は平気であったが、我々はもうダウン寸前であった。

私の経験で、こんなに苦しかったは初めてであった。これが最初の最後であった。

有本君は高専から入隊してきた。最初から意気投合、肝胆相照らす仲であったし、良きライバルでもあった。成績も私に次いでよかった。

現在は成和ビニール株式会社の社長をしておられるが、昔のよしみで時々無理をいって製品を分けてもらっている。

或る日体操の訓練が有り、誰か台の上に乗って号令を掛ける者はいないかと言われた。誰も手を挙げなかったので、私が手を挙げて号令をかけた。

私は、意外に自分自身の心臓が強い事を知った。

訓練の途中、3回ほど私を呼び出し片手に歩兵操典を持った小隊長が、私に質問したが、私は一字一句間違わずに答えた。小田少尉は私に借りがあるので、何とか私の鼻をあかさうとしたが失敗に終わり、諦めてその後質問はしなかった。

訓練が終わると足に巻いたゲートルを取り、これを反物を巻くようにしよう。遅いものが出て、最後から5人程が運動場を5周走らされた。

私は工業学校時代、毎日ゲートルを巻いて通学していたお蔭で、何時も一番速かったので助かった。

或る日腕立て伏せをさせられた。

1〜2〜3とゆつくり号令を掛けて百何拾回かやらされた。

途中でリタイアする者が多く、私は最後の一人になった。

私は常に腕立てをしていたので、要領を心得ていて一番効率の良い手の位置と手の開きをした為に最後まで残ったのだと思う。

■ 防空壕作り

防空壕を作る為に、初年兵は近くの山で伐り出した松のまるたを、一人一本ずつ運び出す事を命じられた。

4〜500メートルの距離を、誰が一番早く持って帰るか、競争である。軍隊は何でも競争させられた。往きは歩いていった。その時私は歩きながら地形を調べた。幾何の3角形の一边は他の2辺より小さい事を思い出し、斜いの地形を調べたら3ヶ所あった。それを覚えておいて山まで歩いた。松の太さはセンチ位で長さは3メートルあった。それを担ぐと走るのである。みんな広い来た道を走ったが、私の帰り道は皆と違って、別に頭に入れていた畔道を走った。案の状私が一番に帰った。しかし、そうして苦労して持って帰った松は、結局防空壕を作らず放置された。こんな田舎に空襲がある訳がない、骨折損の疲れもうけであった。

■ 酒とタバコの配給

或る日の夕方に酒の配給があった。

鎌田兵長に手伝うよう言われた。配分の担当には特権がある、兵長と示し合わせて内密に班長と兵長と私の酒をみんなからへつって我々の量を増やした。その晩に点呼があったが、私は酒を飲み過ぎて酩酊し、点呼の途中で倒れてしまった。後で兵長に、お前はもつと酒に強くならんといかんと注意された。夕食前のすき腹で飲んだ為の悪酔いであり、みんなの倍も飲んだからである。

或る日タバコの配給があった。

主に軍隊用の誉(ほまれ)である、それに光のタバコも一人一箱の割当があったが、誉の味は不味いので、みんなの光をかすめて班長と兵長と私で分けた。誉は少ししか貰わなかった。ところが光の箱を開けて見るとみんなかび^{カビ}ていてかび臭く火が付かな

かった。大失敗であった。「大欲は無欲に似たり」とは此のことである。

■ 営倉入りを免れる

私は中隊付きの曹長の当番を命じられた。

その曹長は45才位の老兵であった。左腕に当番の腕章を付けていたが、当番とは名ばかりでほとんど曹長の世話はしなかった。衛門の出入りは自由であった。或る日鎌田兵長に齒科治療の許可を取り、外出するので一緒に行かないかと誘われた。そのころ山崎の町に造り酒屋があつて、兵隊が行つて金を出すと、酒一合飲ましてくれとの噂があつた。兵長はそれが目当てであつた。私も兵長にならつて酒を飲んだ。

後で知つた事だが、そこは連隊長の宿舍であつて、隣の小隊に（グリット目をむいていたので）グリと言う渾名の割合嫌われていた上等兵が運悪くその酒屋で飲んでいた時に、帰つてきた連隊長に見つかつてしまい、早速その場で所属と氏名を聞かれ、中隊に連絡が行き、その上等兵は階級章を剥奪され、急場しのぎの営倉に何日か入れられた。兵長と私は運よく助かつたのである。

■ 残飯を食べる

昔軍隊では、腹を減らした者が残飯を食べると聞かされていた。

普通残飯はバツカンの食べ残しを一定の場所にあけるので、箸が付いていない奇麗な飯であつたが、我々の時代はバツカンに残る程余裕はなく、残飯はなかつた。しかし炊事場の溝にバツカンを洗つた時に流れた飯があつて、これを手ですくつて食べる者もいた。

第二小隊に、体が大きく頭も余り良くない、阿呆の大食い^{ア呆}とやらで気の毒であつた。彼は何時も上官に叱られていた。

軍隊では大食も小食の者も皆一定の量である。

気のきいた古年兵や戦友が、そんな者には自分の飯を分けてやるのが普通の人情であつたが、彼の班にはそんな気のきいた古年兵がいなかつたらしい、薄情な古年兵ばかりいる班の新兵はかわいそうである。

古年兵は訓練をしないので腹はそんなに空かない筈であるのだが。

■ 砲兵隊

隣の砲兵中隊は、中隊長も小隊長も陸士出身で、我々の中隊の将校とは段違いの筋金入りの貫禄のある将校であった。兵隊は歩兵と違って体は一周り大きいので、将校もこれに応じて大きかった。砲兵中隊の古年兵は歩兵中隊より遙かに柄（がら）が悪かった。或る日、新兵が将校室に食事を運んでいると、将校室の前で古年兵に呼び止められ、『何処へ持つて行くのか』と尋ねられた。聞かなくともわかったことである。そこでその新兵は『将校室に持つて参ります』と答えると、古年兵は『そんな物は将校に取りにこさせ、持つて行く必要はない』と将校室に聞こえる様に大声で言った。無論、将校はこれを聞いている。完全に将校をなめてかかっているのだった。それほど砲兵は柄が悪かった。

或る日砲兵中隊の相撲大会があった。砲兵はからが大きいので相撲大会は伝統の行事であったらしい。将校も禪を絞めて土俵にあがった。将校はくだんの上等兵を相手にして、土俵の上で投げ飛ばした。仇を討ったのである。さすがに砲兵中隊向きに選ばれた将校、あっぱれであった。我々歩兵中隊は相撲はせず見物していた。

■ 新兵が将校室で寝る

八月に入って何日かたった或る日、私が上半身裸で廊下を歩いていたら、小田少尉とすれ違った。

私は蚤に弱く、蚤にかまれ腹から背中にかけて真っ赤に腫れていた。小田少尉にどうしたのかと尋ねられた。講堂には蚤が多く居てかまれましたと答えた。すると将校室のベットが一つ空いているから今晚からそこで寝よと言われ、私はお言葉に甘えますと返答した。

早速班長と戦友の鎌田兵長の了解を取った上でその晩から将校室で寝る事となった。

よくよく考えて見ると厚かましい行動で、班長も兵長も内心不快であったと思う。

ベットは金属製のパイプで出来ていた。やはりそこにも蚤はいたが、一晩に一匹位で助かった。

小田少尉は『日本の軍隊が出来て以来、二等兵の初年兵が将校室で寝るのはお前が初めてである』と言われ、恩にきせられた。少尉は私に借りを返したつもりであったらしい。

■ 軍隊の食事

ここへ来てからの飯は大豆の入った御飯で、白米に、水に漬けてふくらし大豆を混ぜて炊きあげた飯であった。24時間樽で水に漬けてふくらすのである。

私は元来小食であったし、兵長が、食べる前に私の食器に入れてくれるので、腹は減らなかつた。しかし他の新兵は腹をすかし

ていたらしい。そこで樽につかった膨れた豆を夜中に盗みに行く事を考えたのである。

衛兵が立っていてなかなか盗む機会がない、時々移動して、後を向いた瞬間を狙うのである、これは敏捷な者でないとは出来ない、みんなに「吉村お前やつてくれへんか」と頼まれ、私は義侠心？を出し食器をさげて豆をすくって来た。消灯になってからであるから、一隅に集まって食べたが不味いのであまり食べなかった。

食事のおかずは、毎日きゅうりを切って入れたおつゆであった。

瓜を入れたおつゆはよく食べたが、きゅうりのおつゆは初めてであった。

そのきゅうりも、瓜程に大きく育てたバケモノの様なきゅうりであった。

あのような食事で、よく栄養失調にならなかったのが不思議である。

8連隊で食べた漬物は出なかったのが残念であった。

■ 機密作戦の誤り

我が中隊の任務は前述の様に土佐の桂浜で敵のタンクを迎え撃つことであった。

そのための訓練をしていたが、その頃には、沖繩は既にアメリカの手に落ちていた。

※沖繩戦の時には、1200隻を超えるアメリカ軍の戦艦と輸送船が沖繩沖に待機し、艦砲射撃と空爆により、海岸線から何キロも内陸にわたって蟻一匹までも生かさなない程の攻撃を行った上で、無血上陸をしていた。

その当時大本営では、本土決戦を覚悟してその準備をしていたのである、まともな兵器も弾薬もなく、近代兵器と竹槍との決戦となるのは明白で、勝敗は歴然としていた。

実際その時期国民に竹槍を持たせて敵に迎え撃つ訓練をさせていた。

まるでドン・キホウテが風車に向かって行った様なものである。

我々の任務、すなわち桂浜に蛸壺を掘って、上陸してきた敵のタンクを指突爆雷や布団爆雷で仕留めるというのも、又同じである。

日本本土攻略に対してアメリカ軍は、ドイツの降服後の欧州戦線の兵力や艦船を縮小し、大半の戦力をわが国の上陸作戦に回して、沖繩戦以上に、近代兵器を駆使し、物量戦で完膚なきまで徹底的攻撃を加えた後上陸してくるのである。

我々の中隊は成す術もなく、砲弾の餌食となるのは必定であった。

上層部は沖繩戦でアメリカ軍の攻撃戦法は熟知していた筈である。

にもかかわらず、あくまで本土決戦を決めていた。実に愚かしい事であった。

※沖繩Ⅱ沖繩戦、沖繩を防衛する第軍指令官牛島中将

アメリカ軍S20年4月1日沖繩無血上陸

82日間の攻防の末沖繩会戦公式終結（米軍）S20年6月22日

同日、牛島將軍以下幕僚、副官自刃す。

S20年6月25日、日本大本営は、沖繩における日本軍、第32軍の作戦の終結を発表した
沖繩での日本軍の人的損害は、確認された死者10万7539人、

また洞窟内にとじこめられたり、あるいは日本軍の手で埋葬されたと推定される死者
2万3764人、捕虜1万755人

米軍の損害、戦傷死7374人、負傷者3万1807人、行方不明230人。

戦闘外の損害2万6221人、艦船船艇32隻沈没、368隻損傷。

艦載機763機撃墜破、海軍将兵4907人が戦死あるいは行方不明。

4824人負傷した。

日本軍の艦船、戦闘機の損害、7380機撃墜破、軍艦16隻撃沈

戦艦大和は、出動が遅すぎて好機を逸し、超弩級戦艦の巨砲が喰る事なく、沖繩出撃の

第2次世界大戦において米軍の損害比率が沖繩戦で異常に高いのは如何に攻防が熾烈で

米軍の太平洋戦争でこれ以前の、どの会戦よりも「多くの艦船を使用され、多くの部隊

多くの艦砲が陸上目標に使用されたと記録されている。

米軍が沖繩会戦に使用された艦船、空母40隻以上、戦艦18隻、駆逐艦200隻、

その他の艦艇、輸送船、砲艦、揚陸用艦船その他数百隻、

配属された舟だけでも1213隻とされている。

◎ 沖繩Ⅱ陸海空の血戦 ビーニス・M・フランク著書参照

■ 銃の点検

途中米空軍の攻撃を受け撃沈される。

あつたかを証明している。

を揚陸され、多くの補給品を輸送され、

或る日の朝、今夕の点呼に銃の手入れの点検があると通達があった。

その日は半日小銃の手入れを命じられた。

他人の銃は良く手入れがしてあって、鉄びかりしていた。それに比べ、私のは、雑用が多く手入れは殆どしていなかったので赤茶けて錆っていた。

錆はかびの様なもので一度発生すると伝染する様に広がるのである。

何とか錆を取ろうと、布でこすったがなかなか落ちない、ペーパーでもあれば取れるのだが、結局錆は取れず油を塗ってごまかした。銃架に並べて見ると私の銃だけが目立った。週番将校は小田少尉であった。週番将校のたすきを掛けていた。

点呼が終わり銃の点検が始まった。案の状私の銃が目につき、この銃は誰の者かと小田少尉は言った、「それは私の銃でありま

す」と名乗りをあげた、こんなに錆た銃は私唯一人である。吉村の銃である事を知ると小田少尉は鳥羽班長に耳打ちして、『よく手入れをしておく様に言っておけ』と言っただけで事は済んだ、小田少尉は私には寛大であったので助かった。

或る日銃剣術の練習で上等兵と試合をした。

私も学校で練習をしていたので互角に戦った。しかし一瞬の隙をつかれて左の胸当てにまともに一撃をくらって尻もちを着いた。一日の長に兜を脱いだ。

それからが大変であった、胸がなんだか息苦しい感じがして、早速軍医に診てもらった。

聴診器で胸のあたりを診てくれたが、何ともないと言われ安堵した。

八、一期の検閲

普通一期の検閲は入隊して三ヶ月目に行われるが、戦局が悪化し、緊迫した状態であったので、41日目の八月十日に行われた。

或る小学校の広い校庭に一個連隊が集まった、連隊本部の中佐の参謀が部下の参謀を4〜5人従え閱兵するのである。

わが中隊に来た時は中隊長と一緒に付いて来ていて、その参謀が「小銃に菊の御紋が付いて有るのはなに故か」と突然私に尋ねてきた。私は不意を突かれて返答に戸惑った、しかし躊躇は許されない。

即座にこう答えた「小銃に菊の御紋が付いているのは恐れ多くも天皇陛下から賜った事の印で有ります、またわれわれは恐れ多

くも天皇陛下の股肱（ここう）一番頼みとする部下又は手足と頼むもの）として常に陛下がおそばに居られ陛下をお守り申し上げているという尽忠精神を表わして居るので有ります」と答えた。参謀は「よし」と言った。

私の参謀との応対が良かったからであろう。

よくよく考えて見ると、中隊長の指名であつたのではないかと思われる。

終戦後、鎌田兵長から、一期の検閲ではお前が中隊で一番であつたと中隊長が言っていたと伝えられた。

九、終戦

検閲が無事終わってホツとしていた5日後の八月十五日に、天皇のお言葉（玉音）が有るので聞く様に言われ、みんなラヂオの前に整列して聞いたが、感度が悪く全く意味が分からなかった。

後で将校から、日本はこの戦争に負けたのだ、戦争が終わつたと聞かされた。

広島や長崎に、新型爆弾が投下され一瞬にして町は壊滅した、と初めて聞かされた。

いろんなデマが飛び、その中に長の付く者、つまり兵長以上は牽丸を切られて去勢されると言うのもあつて彼等は脅えていた。しかし2、3日でそんなデマはすっかり治まった。

武装解除は終戦から5日目の八月二十日頃だったと思う。

連隊本部の命令で自主的に肅々と行われた。武器はいずこかへ運ばれていった。武装解除前、手持ちの僅かな手留弾で将校が魚を捕るため揖保川で爆破させた。バケツに何杯も捕れた。

その当時揖保川には鮎がたくさんいた。現代であれば大勢の太公望が釣り糸を垂している事であろうが、当時は戦時中でありそんなのどかな風景はなかった。

ちようど落ち鮎の時期で、村の者が総出でやな（竹を並べて川下から川上に向けて川水をすくう様な仕掛け）を作り、竹に上がつて飛び跳ねて居る鮎を捕らえていた。私はその鮎を分けて貰い炊事班の上等兵に頼んで塩焼きにしてもらい、曹長の夕食の膳に添えた。

私は当番の腕章を付けていたので度々兵舎を出て村民に頼んだ。

村民の中には、敗戦と同時に軍人に対する態度が変わって、悔しい思いをさせられた者もいたが、大半の村民は比較的好意的であつたので助かった。

私の自腹で鮎を買い、曹長の膳を賑わしたのに、別れる時一言の礼もなかった事は残念であつた。

■ 鎌田兵長賭博に負ける

武装解除の後も或る程度軍紀は保たれていたが、古年兵の間では賭博が流行っていた。大負けした或る上等兵は、倉庫に有った毛布20枚の一束を持出し町へ売りにいった。

鎌田兵長も800円も負けた。

私に金を貸してくれと言われたが手持ちは300円しかなかった。

兵長にはいろいろ借りがあつたので嫌とは言えず、家に電報を打ち、金を送ってもらい、兵長の面目を立てた。これがせめてもの兵長へのご恩返しであつた。

人には親切にしておくものだとしみじみ思った、毛布を売った上等兵にはそんな部下はいなかった、嫌われていたからである。しかしその後鎌田氏からの返済はなかつた。

八月二五日頃荷物を各自まとめて荷造りし、トラックに積んで大阪に運んだ。何処へ運んだのか記憶にない。私はトラックの助手席に乗って我が家へ寄つた。

親父は復員して来たと思ひ喜んでくれたが、自分は臨時憲兵を命じられ帰れないと言うと、戦争が終わつたのに何で残らないかんのや、とえらく怒られた。

復員する時はみんなシーチキンや肉の缶詰10缶貰つた。

食料がなかつた当時でも、軍隊にはそんな贅沢な食料があつた。

上層部の者は、もつと多くの食料を持って帰つたと思う。

■ 恩賜のたばこをもらつた

復員する前に恩賜のたばこを一箱もらった、綺麗な包装で表に金箔でおした菊の御紋が付いていた、見るからに恩賜という感じがした、復員してから封を切つてたばこを見ると断面は楕円形であつた、たばこにも菊の紋が付いていた、味はほまれの味より少しましな程度であつた。

現代、褒章など宮中でもらつたら必ず恩賜のたばこを頂く、最近それを見せてもらったが、包装はややチャチで、たばこは楕円ではなく丸型で、味は昔と変わらない様であつた。

■ 臨時憲兵と復員

何故臨時憲兵を編成したかと言うと、神戸の三ノ宮や姫路の町の治安を維持する為であった。

当時は警察の権威が著しく低下し、第3国人が我もの顔で無法状態であった。アメリカ軍が来て治安を回復するまでの、万が一の事態に備えての事だった。

姫路に近い田舎の役場の一室を借りて15人が寝起きしていた。

拳銃を支給すると言われて或る小学校の講堂に連れて行かれた。そこには武装解除された拳銃の山が三つあった。一山2000丁はあつたと思う、よくもこんなに有つたものだと感心した。監視が居らず、其の気になれば何丁でも盗む事が出来た。結局拳銃は支給されず帰った。

復員したのは九月十五日であった。家に帰ってやれやれと思つてか緊張がとれ、溜っていた疲労がどつと出て一週間寝込んでしまった。

十、まとめ（無謀な戦争を顧みて）

私が帝国陸軍最後の陸軍二等兵として軍隊生活を体験した事は、私の人生にとって大きく人生観を変えることになった。

軍隊という異常な環境に置かれて、第一度胸が座つた事である。山より大きい猪は出ないと言う事である。また人前に出て、もの怖じなくなつた事であり、上司や同輩との人間関係や、人情の機微に接し、他人がなにを思つて居るか、なにを考えて居るかをいち早く察するようになったことである。これらは大きな収穫であった。

今では自衛隊に体験入隊が出来るらしいが、昔の軍隊と自衛隊とでは比較にならない。

第一給与（食事）が良く待遇は人間尊重を第一としているが、当時の軍隊では兵隊を※一錢五厘の価値しか評価していなかった。人権も、人間の人格さえも無視していた。われわれが入隊した戦争末期には、大分厳しさも緩和していた様だが、それでも十日余りの8連隊の生活は想像以上に厳しいものであった。以前はもつと過酷な軍隊であつたらしいから、昔は新兵の自殺者が出たというのも、うなづけることだと思つた。

前述した様に、アメリカ軍の軍隊生活と比較すると雲泥の差があつた。

アメリカ軍は民主主義を基本とした軍隊である。厳しい軍紀の中にも人権を尊重し、人命重視を基本とした慎重な作戦を立てた。それに比してわが軍隊では、兵隊を消耗品の様に見做していた。従ってその根本的思想の違いから立てる作戦は、基本的に違うのである。

若し私に才能が有り、もっと早く生まれていて、帷幄（いあく）参謀本部に席を置くか技術将校の高官であったなら（あくまで仮定）、勿論その壁は厚かったであろうが、私は軍隊の悪弊を排除してアメリカ式の軍隊を作り最新の兵器で以て人命尊重の作戦を立てたであろう。

その当時のわが国の軍人は驕慢にしていっしかな不遜になり倨傲（ききょう）にしていっしかな自信過剰に陥っていた。

※一銭五厘＝徴集令状の郵便ハガキ(赤紙)は、当時一銭五厘であった。

それ故兵隊の価値はハガキ代と同価の一銭五厘といわれた。

■ 戦争の性格※

第二次世界大戦はそもそもドイツ対イギリス・フランスの戦争、ドイツ対ソビエトの戦争、日中戦争、太平洋戦争と、いくつかの戦争が重合したきわめて複雑な性格をもった戦争である。

第二次世界大戦は、帝国主義諸国間の戦争（ドイツ・イタリヤ対イギリス・フランスの戦争、日本対アメリカの戦争）であると同時にファシズム諸国（日本・ドイツ・イタリヤのいわゆる枢軸国）対民主主義諸国（イギリス・アメリカ・フランス・ソビエト★ソビエトは民主主義国でない★連合）の戦いであったことが大きな特徴である。しかし同時にこの戦争は資本主義諸国対社会主義国（ドイツ対ソビエトの戦争）の戦争でもあり帝国主義国と被圧民族との戦争、いいかえれば侵略主義者に対する民族開放の戦い（日中戦争・太平洋戦争や東欧の反ナチ＝レジスタンス）でもあったわけで、こうしてみると第二次世界大戦は性格を異にするいくつかの戦争が世界的な規模で相ついで展開されたものとみることができ。

従ってこのことが大戦の前史および戦時中、戦後の各国の対外政策（あるいは戦略構想）に微妙に反映し、同じ陣営に属しながらも、時として強く接近し、時として離反と対立を深めていった事態を招来したのである。

こうして過去の戦争の歴史を辿ってみると、あなたがち日中戦争や太平洋戦争は、侵略戦争とは断定出来ない性格をもち、複雑な国際関係が絡み合った戦争であったことがわかる。

かえりみると満州某重大事件からノーウイン（勝利のない戦い）の旅立ちが始まり、遂に日中戦争、太平洋戦争へとエスカレートしていったのである。

かくしてわが国の敗戦とともに、軍閥は解体される運命を辿り、永年にわたり君臨した歴史をとじた。軍閥の傲慢と自信過剰は、神國の神の加護を信じ、精神力でもってアメリカの近代兵器と物量戦に勝てると思っていた。自業自得の結果であった。

※この項は大日本百科事典の一部参照

■ 太平洋戦争の転回点

(日米“死闘の島”ガダルカナル島)

太平洋戦争ではガダルカナルは特別の意味があった。太平洋は広大な戦闘の舞台であり、そこでくりひろげられた戦闘は前例を見ないものだった。世界の他の地域の戦闘にも見られない、おおくの戦闘ドラマのフロントステージに立ったのがガダルカナルの戦いであった。

連合軍のカダルカナル作戦をいかに戦うかについての決定は、事実上、すべて実験的性格をもっていたのだから、多少の手ちがいや混乱があったとしてもそれは当然のことであつただろう。

当時の米軍は、太平洋戦争の後期にみられたような、統制のとれた効果的な上陸作戦などは、望むべくもない状態にあつた。しいていうならば、カダルカナル作戦は、その後の上陸作戦の道しるべであつた。この作戦から多くの教訓を学んだのである。米軍がカダルカナル島に、巡洋艦4隻、駆逐艦6隻による砲撃を開始したのは1942年(昭和十七年)八月七日の午前6時14分、わが軍が米国に宣戦布告してから僅か8ヶ月後のことである。また同時に、カダルカナルの南西140キロにひそんでいた空母艦隊から発進した85機の爆撃機と戦闘機による爆撃も開始された。

上陸以後の戦闘も米軍にとつては初めての上陸戦闘として記憶されるべきである。これも前例のない陣地の争奪を繰返したあげく、“不敗”を誇っていた日本軍を徹底的に打ちのめし、多数の戦死者を出したあげく、不名誉な撤退においこんだのである。

日本軍は、過去の戦歴がしめすように頑強であり、将兵は忠誠で果敢であり、全滅するまで勇猛に戦った。

ソロモン諸島の中でこの島は、日米両軍にとつて領土確保闘争の代表的なテストケースとなり、現在、一般に知られている「エスカレーション」「段階的拡大戦争」の代表例である。

島を占領したとき、米軍は最悪の条件を乗り越え、持てる力をふりしぼって戦いをいどんだわが軍に対して明らかに勝利をおさめたのである。

五ヶ月あまりの戦いでわが陸軍の死者は2万1138人海軍の死者3800人であった。一方米軍は、上陸した兵士1500

人以上、海上でわが軍の空爆による死者も1500人を上回ったといわれている。しかし、米軍の死者(損害)はわが軍の12・8%にすぎなかった。日本軍の最後にブーゲンビル島へ命ながら撤退した兵数は、1万220人といわれている。

何故これほど、日米両軍がカダルカナル島の争奪にこだわったかと言うと、地理的に、ニューギニアの東方、ソロモン諸島の東端にあり、わが軍勢力範囲の太平洋の最南端に位置し、ここには空軍の滑走路があつて、両軍にとって戦略的に最重要拠点であつたからである。

カダルカナル島を占領した米軍は、この滑走路から飛び立った戦闘機や爆撃機で、次々とわが軍の占領した島々を空襲、これを奪還し、制海権と制空権を奪い、遂に沖繩を陥落し、本土決戦へと追いこんでいったのである。

※ この項はグレイム・ケント著書【カダルカナル】を一部参照

■ わが国とアメリカの第二次大戦の人的被害の比較

数字を見るとアメリカの人的損失は日本の損失の17・5%である。ただしこの数字は欧州の戦線の損失も含まれている。

また、別の史料によると兵員の戦死者はアメリカは日本の20%である。

負傷者も日本の14・5%である。アメリカ軍は如何に人命を尊重し、有効な戦をしたかを如実に証明している。

■ 終戦の好機を逸す

昭和十八年十一月、米英ソ三国首脳テヘラン会談に於いて、米英首脳はソ連に対し日本に参戦することをうながしたが、ソ連はドイツと戦っている最中であり、とてもそこまで軍隊や兵器を満州に裂けないと即時参戦は断った。が、樺太、千島列島の領有と引き換えに、ドイツ降服後3ヶ月での対日参戦を約束した。

当時のブルガリヤ駐在武官秘書、吉川光氏はこの会談の内容を事前に入手し、日本に電報で伝えていた。にもかかわらず、日本の首脳は、中立条約「(条約とは、破られる為にある)といわれている」を締結していたソ連の翻意を知らなかった。

もしソ連の翻意を知っていたら、その後の対ソ戦略も違ったと思われるのだが。「当時の参謀本部は硬直化しており、情報を握りつぶされた可能性もある」とされている。

元大本営参謀少佐堀栄三氏の著書「大本営参謀の情報戦記」に「この情報を公にすれば、軍部に動揺が起こる。それを防ぐ為に参謀本部中枢が握りつぶしたか、電報の内容が信用されなかったか。当時の参謀本部は硬直化しており、両方の可能性がある」

と記している。

米国の駐ソ軍事使節団長、デイーン中将の回顧録によれば、1942年（昭和十七年）八月中旬、スターリンはハリマン駐ソ米国大使に対し「日本はロシアの歴史的な敵国であり、その究極における撃破がソ連の国益にとって緊要である。……ソ連は今の軍事情勢からは対日参戦は出来ないが、いずれ参戦するであろう」と語っている。

※ 独ソ戦開始から終結までの間に、極東ソ連の武装が強化されていることが分かる。

デ・エフ・ウスチノフ監修「第二次世界大戦史」参照

1943年 昭和一八年一月米英首脳によるカサブランカ会談で、ルーズベルト大統領は「もし可能ならば、ロシアからドイツが戦線離脱する時、対日戦に加わるといふ明確な約束を得ることは非常に望ましかろう」とソ連の対日参戦を希望。

さらに同年二月、スターリンはモスクワを訪問した米国のハレー特使に対し「ドイツを撃破したら、ソ連は対日戦に加わって米国を援助するつもり」と発言している。

同年十一月二八日、テヘランでの米英ソ首脳会談でスターリンは、ドイツ降服後の対日参戦を公式に表明した。

翌1944年十二月十四日スターリンはハリマン駐ソ米国大使に対日参戦の代償として千島列島、南樺太の領有などを要求、これがヤルタ協定につながったのである。

防衛庁幹部学校研究員、井上要氏の研究によると、スターリンがワシレフスキー元帥に極東行きを指示したのは、1944年八月。翌九月わが参謀本部ではソ連の極東への戦力集中についての見積も行われ、ソ連は同年十二月一日、兵器、弾薬、燃料、食料などの極東への輸送を開始した。

翌1945年三月三十一日、メレツコフ元帥を司令官とする沿海軍（後の第一極東方面軍）の司令部要員が極東へ出発。

その5日後の四月五日、ソ連は日本に対して日ソ中立条約の不延長通告を行った。

日本がこうしたソ連側の動きを少しでも把握していれば、その後の戦略や終戦工作の様相が違ったといわれている。ところが、当時、スウェーデン駐在武官だった故・小野寺信少将の妻、百合子さんが最近になって、「私たちはヤルタ協定の中身を直接に入手し、日本に暗号電報で伝えた」と証言され、波紋を広げている。

百合子さんによると、その内容は「ソ連ハドイツノ降服後3カ月ヲ準備期間トシテ対日参戦スルトイフ密約ガデキタ」とされている。

しかし、この電報に対する大本営からの返答はなかった。

当時の大本営参謀本部欧米課英米班長（少佐）だった大屋角造氏は、「そうした電文は記憶にない」と証言している。結局日本はソ連側の意図を見抜けなかったのである。

スターリンは、ソ連が日本に参戦して米軍を助けると約束したが、結局実際に行動に移したのは、日本が刀折れ矢つき満身創痍の最後の土壇場、1945年、昭和二〇年八月十五日、終戦の6日前だった。

つまり八月九日にソ連軍はわが国に参戦したのだが、これでは、なにもアメリカ軍に協力したとは言えない。卑怯極まるやり方である。

千島を守っていたわが軍は善戦しソ連軍を圧倒していたが、終戦の為にソ連軍に降服しなければならなかった。このことは、千島を守っていた将兵にとっては無念断腸の思いであっただろう。

また、ソ満国境を守っていた関東軍約万人に対して、ソ連軍は実に約2倍の120万人の兵力で攻めてきた。

その上わが軍の装備は、南方方面軍に分散された事もあるが、前述したように兵器や装備においてもソ連に比し格段に貧弱であったと思料される。

関東軍万の将兵は、2倍の兵力で怒涛の如くソ満国境を越えてきたソ連軍に、またたく間に蹂躪され、捕虜となった。

極東ソ連軍の配備の表を見ると、ドイツとの戦争の最中でさえ、あれ程の兵員と武器、戦闘機を配備してきたことは敵ながらあつぱれであった。

それにしても、ブルガリヤの駐在武官の秘書からの電文や、スウェーデンの駐在武官の情報を真執に受け止めて、対策を立てておれば自（おのず）と終戦の好機をつかめたと思料されるのに、残念である。

そうしておれば、多数の将兵は捕虜にならず、多数の民間人も難を逃れることが出来たと思料される、まさしく軍部の怠慢であった。

ソ連は、旧ロシア帝政時代よりの南進主義を踏襲していた。

大きな領地を持ちながら、風土は厳寒で凍土（ツンドラ）の地が多く、国民の生活にとっては厳しい土地柄である。

地下資源は豊富であっても、凍土で開発も容易ではない。

軍港も北方では、冬には凍結して使用不能になってしまう。(現在では、砕氷船があるだろうが)従って南へ南へと侵略して行く事が一種の国策であり、国家の命運を掛けた至上命令でもあった。旧ソ連も、帝政ロシア時代に南に侵略して併合を繰り返し連邦となったのである。わが軍が、南進主義のソ連を、満州の国境で阻止しようとしたのもその為であった。

※この項は産経新聞 検証「戦後日ソ」の原点の一部参照

■ シベリヤ抑留

旧ソ連内務省の資料によると、ソ連軍が対日参戦したのは1945年(昭和二十年)八月九日から九月二日までの間で、終戦から十八日も過ぎていてもソ連は銚(ほこ)をおさめなかった。実に卑劣なやり方であった。

ソ連軍は、旧満州、朝鮮半島、千島列島などで、日本人将兵63万9635人を捕虜にした。うち6万5245人を十月までに解放したが、1万5986人が前線の收容所や捕虜集結地で病気や負傷で死亡し、1万2318人がモンゴルに移送された。

その後、54万6086人(うち将官176人)がシベリヤなどソ連各地の收容所に移送された。

日本軍将兵は、戦後ソ連の復興のために過酷な強制労働を強いられ、4万6082人が飢えと寒さ、病気などで無念な死をとげた。

前線の收容所での死亡者を合わせた全死亡者6万2068人の内分けは、将官32人、将校612人、下士官、兵士、6万1424人であった。

これはまさしく国際法の違反であり厳しくその責任を追究されるべき重大事件である。

どうにか生き残った抑留者は、1950年(昭和二十五年)四月末までにほとんどが帰国。

抑留中にソ連の軍事法廷で戦犯とされた人も日ソ国交正常化を機に、1956年(昭和三十一年)末までに釈放され、帰国した。ソ連から一方的に中立条約を破り、ソ満国境を越えて攻めて来たもので、わが軍は中立条約を守ったのが早期の敗北につながった。

わが軍になんの落ち度も無いのに、戦犯にされた将校はお気の毒としかいい様がない。

この様なソ連の理不尽な行為を受けた日本国民は、この怨念を子子孫孫忘却してはならない。

■ 河上肇の警鐘を軽視する

河上肇は、明治、大正、昭和の3代にわたって論壇に光芒を放った碩学である。

かれは、日露戦争の勝利で国家主義的風潮が強まった時「みだりに天祐を迷信し過（あやま）つて中華の謬想（びようそう）間違った想い）に陥ることあらんか」と警鐘を鳴らした。

驚くべき先見性であったが、その後の国務大臣は天皇に対する輔弼（ほひつ）天子・君主などの統治権行使をたすけること、またはその任にあたる人）を怠ったのである。

十一、あとがき

私の軍隊生活は、わが国最後の大日本帝国陸軍に、正式にはわずか56日間と、そのご終戦から復員までの十日間、合計日間席を置いただけのものであったが、その短い間に、最良の上司や戦友、同輩に恵まれ、苦しい軍事訓練も互いに助け合い、また作戦部隊になつてからの班内勤務も毎日楽しく過ごすことができた。

私は比較的と言うよりも、まことに気侘な軍隊生活を送る事が出来た。

これも上司や戦友先輩が非常に寛大で、寛容の精神で私を許してくれたお蔭と、感謝している。

有本君には特に頭が下がる思いである。彼は芯は強いが、心根は優しい人柄であった。

私はそういう彼を心から尊敬していた。

その当時の上司や同輩は今ごろどうしておられるであろうか。また妖逝された方もおられるであろうか。ご健在でおられるなら、今後のご健勝とご多幸をお祈りしたい。

また他界された方には心よりご冥福を祈り致します。

さまざまな想い出が走馬灯のごとくよみがえり、想い出はつきない。

戦後日本の分割を要求したソ連に対し、将介石は強硬に反対し「報怨以德」「怨みに報ずるに徳を以つてせよ」と言つて日本の分割が実現しなかつたことは、日本民族にとってまことに幸いであつた。

いまはなき故・将介石総統に衷心より感謝しつつ、このへんで筆を擱く。

◎ 残念ながら唯一入隊時の記念写真を紛失して掲載出来ないのは残念である。

題 軍閥

軍閥に題す

軍閥慾驕傲

軍閥驕傲を慾きようごうにしほしいまま

干戈幾星霜

干戈幾星霜かんか

夢悲大東亜

夢悲し大東亜

聖戰轉斷腸

聖戰うたた轉斷腸

災禍六百萬

災禍六百萬

瓦解天下康

瓦解して天下康らかなり